

中南米及びカナダ移住者子弟の
日本語教育調査
報告書

1980. 2

国際協力事業団
移住海外事業部

JICA
600
24.5
ESE
BRARY

移生環
J R
80-6

JICA LIBRARY



1019636[6]

国際協力事業団	
受入 月日 1984. 3. 16	600
登録No. 00580	24.5
	ESE

ま え が き

わが国の南北アメリカ大陸への移住は、明治元年のハワイ移住に始って、既に112年を経過し海外日系人は北米約602,000人、中南米約723,000人と推定されている。

日本語教育についても、日本人の移住に伴って各地で古くから、戦前は文部省所管の学校の外に日系団体の運営や、私立学校等の形で行われてきており、最近是我が国の国際的地位の向上に伴い、受入国においても日本語教育に対する関心が高まり、大学における日本語課程の設置の外、初等教育課程における外国語教育として公認されている国もある。

国際協力事業団では、主として戦後移住者及びその子弟を中心に日本語教育の援助を行っているが、その実情を把握するため、玉川大学 上原舜男、岡田陽、橋本道名教授の協力を得、中南米及びカナダの一部について1カ月の調査を実施した。本報告はこれを取りまとめたものである。

調査の実施にあたって、外務省、玉川大学、在外公館、訪問国の日系教育関係諸団体、在外支部、駐在員から多大の協力を得た。ここに深甚なる感謝の意を表したい。

この報告が、海外日系社会における児童の日本語教育問題についての認識を深める一助となれば幸いである。

昭和55年2月1日

移住海外事業部長

はじめに

この報告書は、1979年10月3日から11月3日にわたり、「中・南米・カナダにおける移住者子弟の日本語教育調査」として、現地で行った調査の結果をとりまとめたものである。

移住者子弟に対する日本語教育は、戦前から、アメリカ、カナダ、中南米各国の日本人移住者の社会において行われてきているが、最近ではこれら日系の運営団体に対する援助等として国際協力事業団、並びに国際交流基金でもとりあげられている。国際交流基金の日本語教育援助は、もともと外国人に対するそれであるが、カナダ、アメリカ、ペルー等、移住者の世代交代がすすんでいる地域では、外国人である日系人に対しても行われている。これに対し、国際協力事業団移住部門で行っている日本語教育は、日本人である海外移住者に対する定着支援施策の一環として行われているもので、主として中南米、カナダにおける戦後移住者及びその子弟を中心とし、一部戦前戦後移住者との混在地域に及んでいる。

国際協力事業団の日本語教育援助は、予算的には昭和46年度から始められ、教具教材等の整備、教師謝金の補助、日本からの指導教師派遣、現地日本語教師の本部研修などが行われてきているが、これら教育環境の整備充実を図ることも、重要な施策の一環ではあるが、何故日本語教育をやらねばならないか、どこまでやるべきかといった教育上の理念や、施策上の見定めとともに、日本における日本的意識や行動様式を殆んどそのまま移住先へ持ち込み、同化適応という変化過程にある両親との家庭生活ないし地域社会で生を享け成長する日系児童若しくは日本で或る段階まで成長発達してから母国を離れた児童が、生活条件の異なる外国の風土にあつて、どのような精神的発達やパーソナリティの形式、言語獲得を遂げていくか、それに対して教育の場においてはどうあらねばならないか、そのための手法は、といった、児童の教育の本質的な問題の検討を経て日本語教育の問題を促える必要があつた。

そのため、我々調査団は、移住先の日系児童が、彼等がおかれている環境から、意識を持ち、行動し、その結果として、現地語、母国語をどのように獲得しているか、父兄並に地域社会の取組み意識などの把握を重点として、様々な地理的条件、移住世代にかかわる時間的条件、文化受容程度等による類型化を試行しながら調査を行った。

勿論、短期間の調査旅行であり、従来からこの種の調査は皆無に等しいので、必ずしも調査の意図が達成されたとは思っていないが問題提起としては評価して頂けると思っている。

最後に、この調査の実施にあたり、多大な協力を賜った、在ヴェネズエラ日本国大使館、在ペルー日本国大使館、在アルゼンチン日本国大使館、在パラグアイ日本国大使館、在ドミニカ日本国大使館、サンパウロ総領事館、ベレーン総領事館、トロント総領事館、バンクーバー総領事館、JICA、リマ、サンタクルス、ブエノスアイレス、アスンシオン、サンパウロ、ベレーン、サントドミンゴ、トロント各事務所、支館（支所、事業所を含む）、日系コロニアの教育運営団体、訪問先の日本語学校、日本語教師、日本から派遣している中山博（ポリビア）、外村誠也（パラグアイ）、

畑本久信(ドミニカ)、正善達三(アルゼンチン)、清水武二(アルゼンチン)の各指導教師、ブ
エノスアイレス大学日本語科講師佐々木邦子の各位に対し、心から謝意を表します。

昭和55年1月

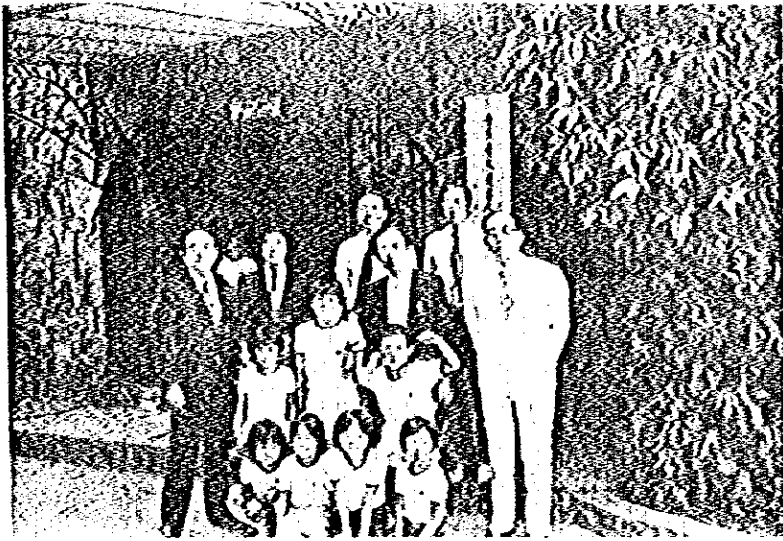
中・南米・及びカナダ移住者子弟日本語教育調査団

上 原 輝 男 (玉川大学教授)

岡 田 陽 (, ,)

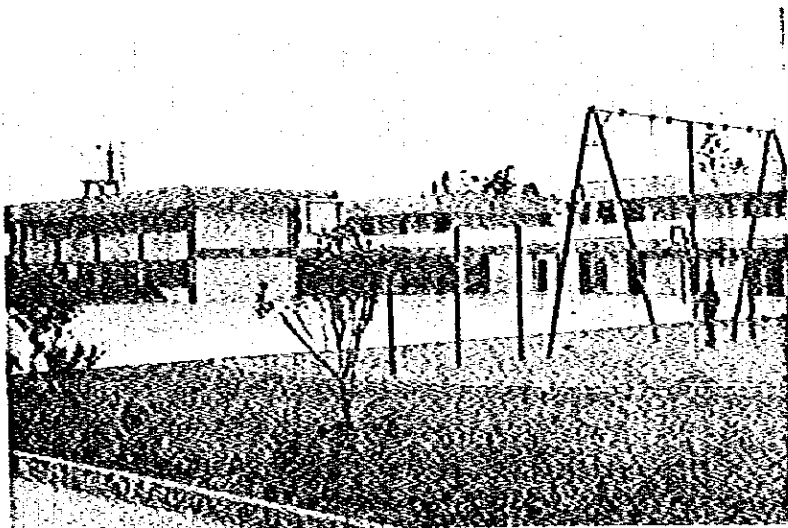
橋 本 道 (, ,)

榮 田 剛 (国際協力事業団)

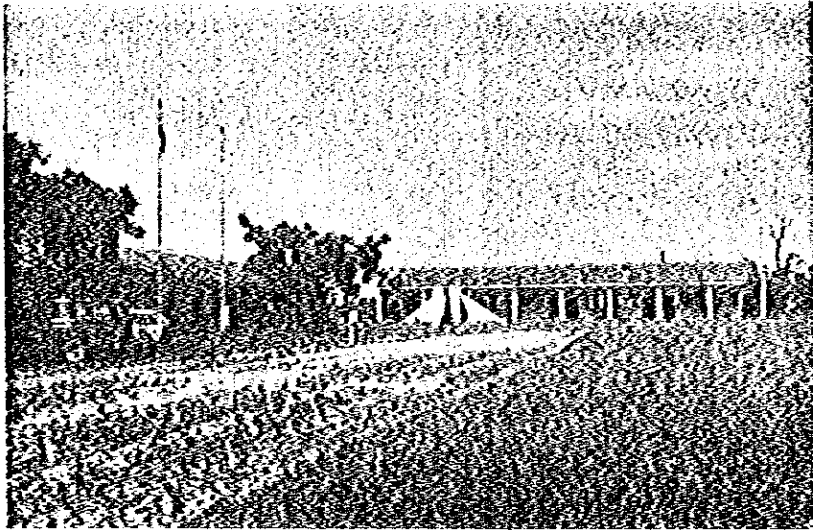


カラカス日本人
学校の生徒たち
(ヴェネズエラ、カラカス)

—授業が終って—
ビクトリア小学校
の児童たち
(ペルー、リマ市)

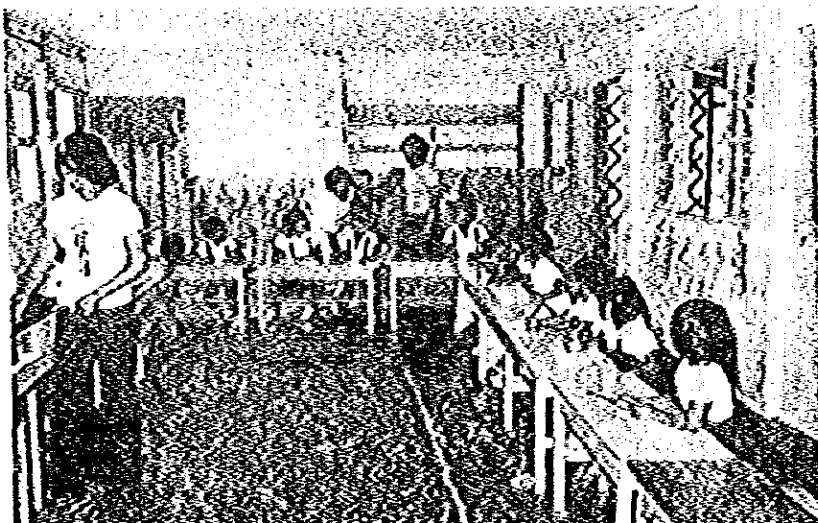


ラ・ウニオン校外観
(ペルー、リマ市)

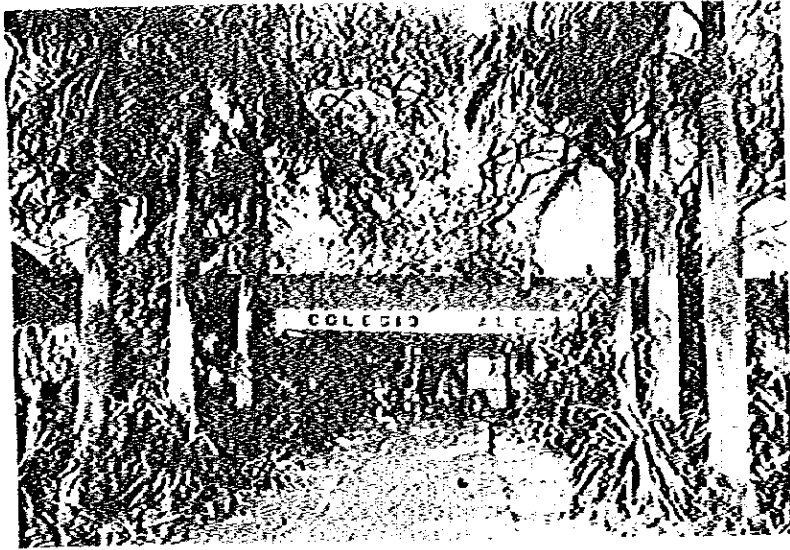


サンフアン小学校
(ボリビア・サンフアン)

サンフアン小学校の
児童たち
(ボリビア・サンフアン)

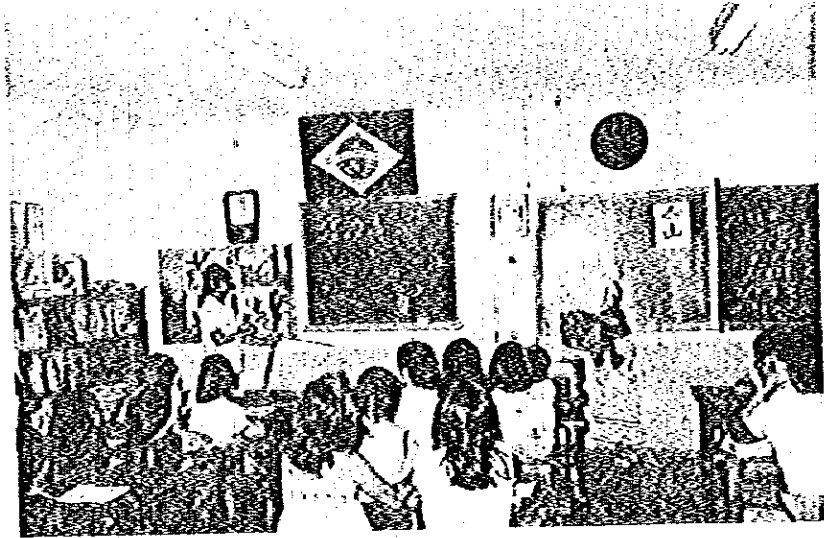


オキナワ第1幼稚園
(ボリビア・オキナワ)

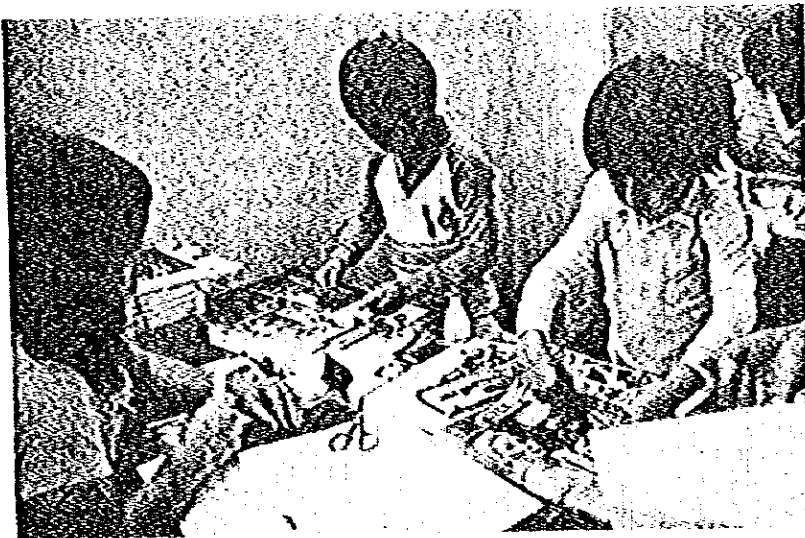


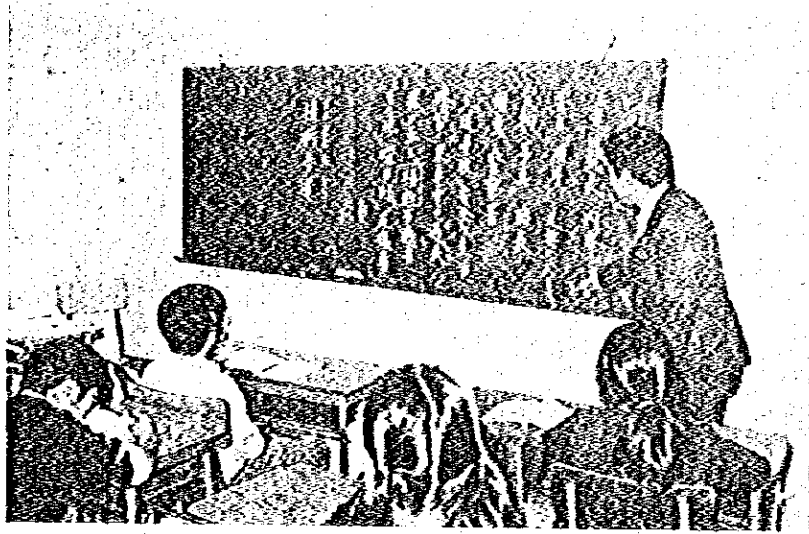
ドイツ学校
(ボリビア・サンタクルス市)

ウアルガス学園における
劇をとり入れた学習
(サンパウロ市・ウアルガス学園)

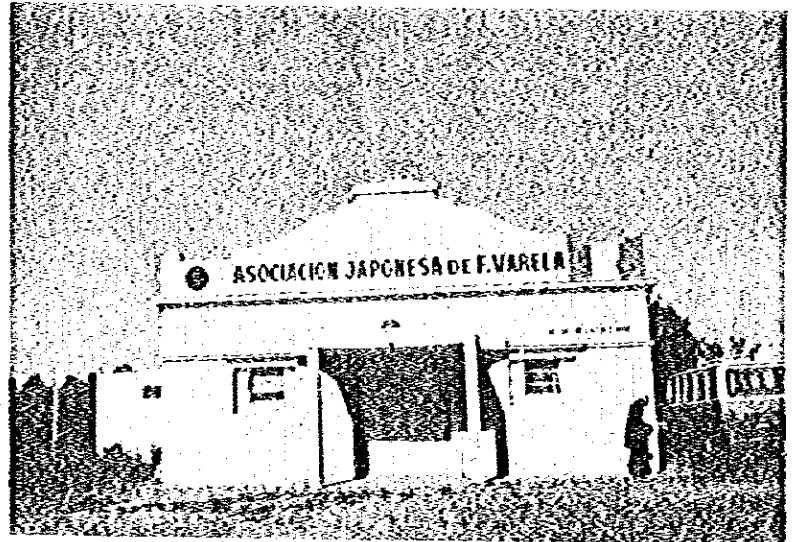


切り絵を楽しむ児童たち
(サンパウロ市・松柏学園)

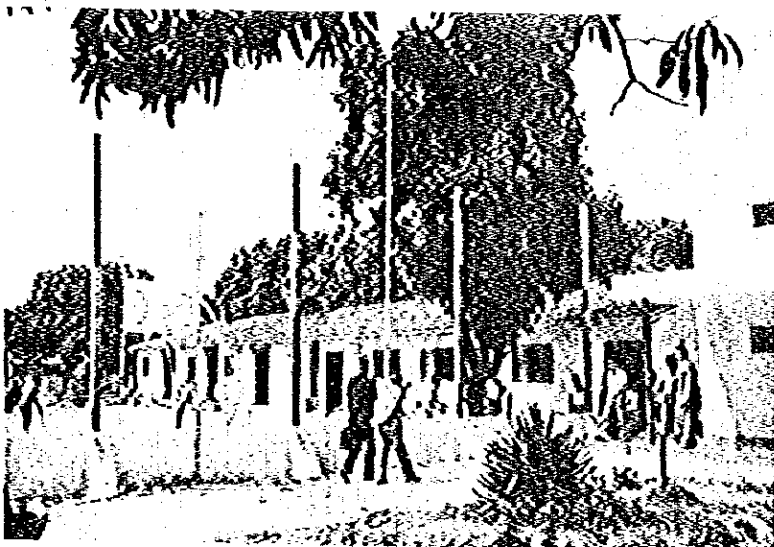




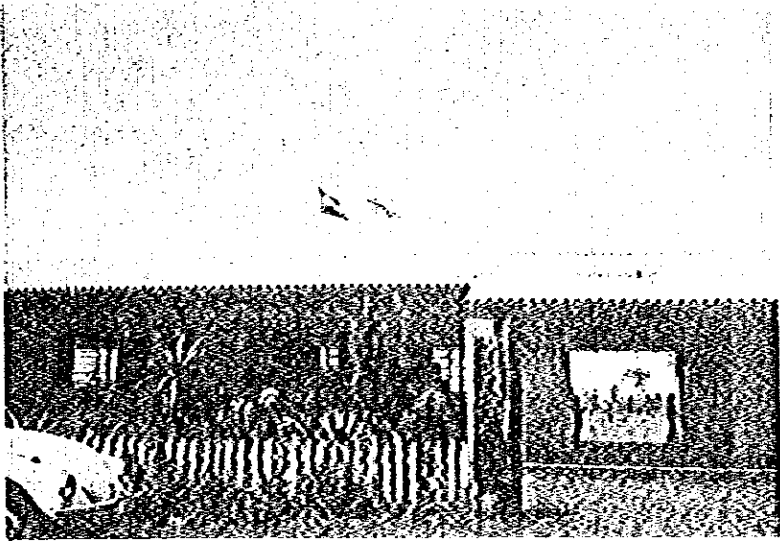
ブエノスアイレス日
学院における授業
(アルゼンチン・ブエノスアイレス市)



フロレンシアバセラ日本語
学校
(アルゼンチン・フロレンシアバセラ市)

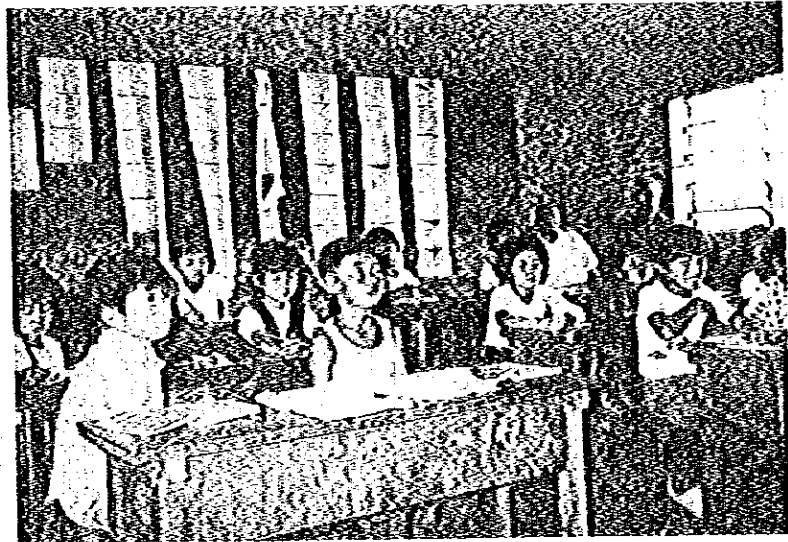


アスンシオン日本語学校
(パラグアイ・アスンシオン市)

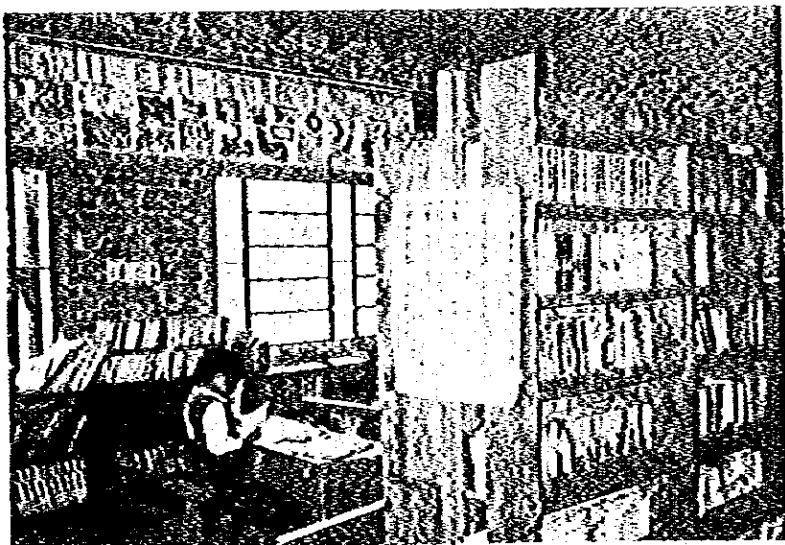


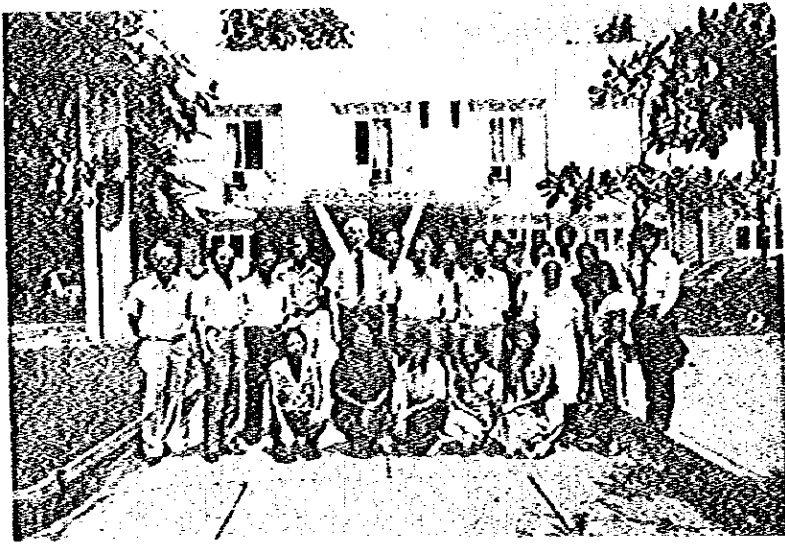
イグアス日本語学校
(パラグアイ、イグアス)

楽しく、暖い人々
な児童の眼
イグアス日本語学校にて



イグアス日本語学校
図書室
(蔵書 1,500 冊)





日本語教師研修会を
終って
汎アマゾン日伯協会にて
(ブラジル、ベレン市)



サントドミンゴ日本語学校
の授業
(ドミニカ、サントドミンゴ市)

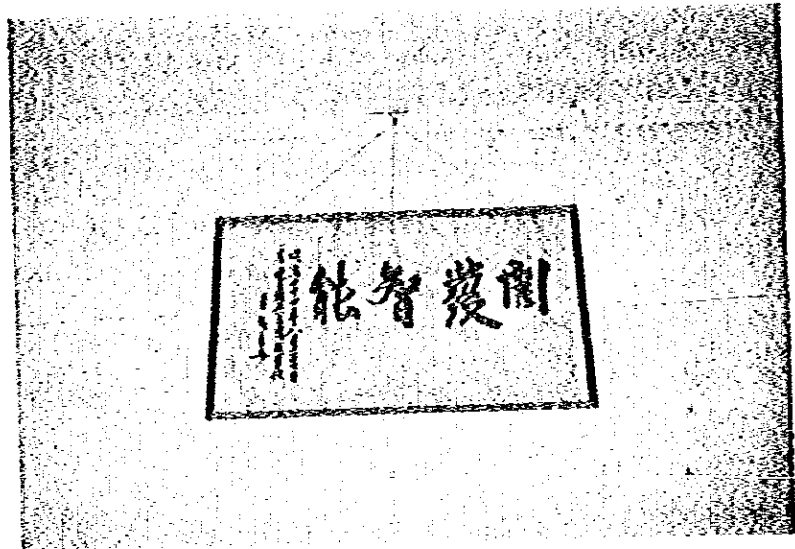


日本語教師研修会
を終って
(ドミニカ、サントドミンゴ市)



日本語教育懇談会
(カナダ、トロント市)

バンクーバー日本語学校
教室に掲げてある東洋
平八郎の書
(カナダ、バンクーバー市)



ハロウインパーティを
楽しむバンクーバー日本語
学校児童
(カナダ、バンクーバー市)

目 次

まえがき	
はしがき	
第1章 調査団の日程と行動	1
1. 調査団日程概要	1
2. 調査団行動図	9
第2章 要約と提言	10
1. 要 約	10
2. 提 言	11
第3章 調査概況 — 対象把握の方法と問題の所在	13
第4章 調査内容と考察	16
第1節 移住者(父兄)の日本語に対する意識・認識の実情	16
第2節 その教師・教材(教科書)・学習指導要領・派遣指導教師について	31
あ と が き	38
付表 日本語学校概況	39

第1章 調査団の日程と行動

1 調査団日程概要

年・月・日(曜日)	行 動 概 要
54.10. 3 (水)	調査団出発、新東京国際空港発10:00 JI,006便(アンカレッジ経由) ニューヨーク、ケネディ空港中継、20:40ベネズエラ、カラカス空港着。日本大使館、松本館員に迎えられHOTEL SAVOY投宿。
10. 4 (木)	日本大使館表敬訪問、野村大使、角田参事官、清水一等書記官に挨拶。清水書記官と日程打合せ 神田修ベネズエラ日本人会長より日本人会、日本語教育、事業団海外実習生受入について状況聴取、カラカス日本人学校並びに同校併設(日本語)矯修科訪問 山田新忠校長、橋本教頭と懇談 54年度海外実習生受入にかかる企業訪問(矢沢及び米倉商会)
5日(金)	09:30VIASA機にてカラカス空港発、12:10ペルーリマ空港着、リマ事務所、館所員並びに榎田正三ペルー中央日本人会副会長に迎えられ、ラ・ビクトリア小学校に直行、授業参観。 日本大使館訪問、長崎大使に挨拶、渡辺一等書記官からペルーにおける日本語教育について説明をきく。
6日(土)	ラ・ウニオン総合学校訪問、森本エレナ主任教諭より日本語教育状況聴取 ホセ・ガルベス小学校を訪問、校長(ペルー人)及びカヤオ日本人会山川宗英会長外より実情聴取 夜、日秘文化会館における日本語教師懇談会に出席
7日(日)	館所員と業務打合せ 14:20LB977にてリマ空港発、ラパス経由18:40サンタクルス空港着、HOTEL ASTURIAS投宿。
10. 8 (月)	09:00サンタクルス支部訪問、末永支部長より管内概況、日本語教育の現状について説明を受け、調査日程打合せ。前田業務課長、中山派遣指導教師の案内でサンファン移住地へ。 11:00、サンファン事業所到着、上関所長より概況説明、移住地視察、農家における日本語使用状況調査、サンファン日本語学校授業参観ついて日本語教育座談会。於サンファン農協 出席者は調査団の外次のとおり。 サンファン日本語校 高野 美喜夫

年・月・日(曜日)	行 動 概 要
	サンファン日本語校 深 浦 晴 子
	・ ・ 斉 藤 クニ子
	・ ・ 萩 原 敏 子
	・ ・ 笹 木 久美子
	・ ・ 向 後 睦 子
	・ ・ 斉 藤 ル ツ
	サンファン日ボ協会会長 宮 原 定
	父兄会長 西 沢 篤 視
	外
	ドミニカ言語派遣指導教師 畑 本 久 信
	ボリビア言語派遣指導教師 中 山 博
	サンタクルス支部業務課長 前 田 武 彦
	サンファン事業所長 上 園 義 房
10. 9 (火)	診療所、試験農場、サンファン農協、日ボ協会に挨拶のちオキナワ移住地へ。 コロニアオキナワ第一学校(エバンヘリカノトジスタ第一オキナワ小中学校) 授業参観
	教師、運営理事会役員と懇談
	第1オキナワ日本語学校 石 丸 泰 樹
	・ 大 眞 豊 子
	・ 池 原 孝 子
	・ 大 城 弘 治
	・ 石 丸 啓 子
	・ 儀 間 弘 治
	・ 幼稚園 大 城 静 枝
	・ 父兄会長 与 原 巖 光 雄
	事業団沖縄事業所長 永 山 盛 章
	・ 職員 千 坂 平 通
	・ サンタクルス支部業務課長 前 田 武 彦
	調査団(上原、橋本、栄田)
	次いでエスクエラセントラル・ヌエバ・エスペランサ校授業参観、同校教師と懇談。

年・月・日(曜日)	行 動 観 要																		
10.10 (水)	<p>18:30、サンタクルス市帰着</p> <p>COLEGIO ALEMÁN (ドイツ学校)訪問、(1937年創立、生徒数1,000名、教師50名)、校長、幼稚園長より説明を聞き、授業参観。</p> <p>サンタクルス日本語補習学校訪問、教師、運営役員と懇談。</p> <p>出席者</p> <table border="0"> <tr> <td>サンタクルス日本語補習学校</td> <td>志 賀 美和子</td> </tr> <tr> <td>・</td> <td>近 藤 幸 雄</td> </tr> <tr> <td>・</td> <td>平 良 智恵美</td> </tr> <tr> <td>・</td> <td>沢 元 美智代</td> </tr> <tr> <td>サンタクルス中央日本人会長</td> <td>土 井 智</td> </tr> <tr> <td>ボリビア国派遣指導教師</td> <td>中 山 博</td> </tr> <tr> <td>ドミニカ国</td> <td>畑 本 久 信</td> </tr> </table> <p>調査団(上原、橋本、栗田)</p> <p>次いでサンタクルス学生寮を訪問、高校生の日本語意識等調査。</p>	サンタクルス日本語補習学校	志 賀 美和子	・	近 藤 幸 雄	・	平 良 智恵美	・	沢 元 美智代	サンタクルス中央日本人会長	土 井 智	ボリビア国派遣指導教師	中 山 博	ドミニカ国	畑 本 久 信				
サンタクルス日本語補習学校	志 賀 美和子																		
・	近 藤 幸 雄																		
・	平 良 智恵美																		
・	沢 元 美智代																		
サンタクルス中央日本人会長	土 井 智																		
ボリビア国派遣指導教師	中 山 博																		
ドミニカ国	畑 本 久 信																		
10.11 (木)	<p>サンタクルス日本領事事務所、オキナワ農牧組合(CAICO)訪問。</p> <p>16:30SC881にてサンパウロへ。HOTEL DANUBIO 投宿。</p>																		
11.12 (金)	<p>サンパウロ支部にて業務打合せ(平尾支部長、堀口兼1課長、小畑職員)</p> <p>日伯文化連盟(岡本淳会長、花田正洋ルイス事務局長)、伯国日本語学校連合会(橋手幸吉事務局長)訪問。邦字紙(日伯毎日、上田記者)と記者会見。</p> <p>日本語教室ヴァルガス学園(園長、塚本信子、幼稚園主任綿引津多)授業参観、次いで松柏学園授業参観。</p> <p>サンパウロ総領事館表敬訪問。</p>																		
11.13 (土)	<p>日本語教育懇談会 於文協貴賓室</p> <p>出席者</p> <table border="0"> <tr> <td>松柏学園</td> <td>川 村 万里子</td> </tr> <tr> <td></td> <td>上 田 きよ子</td> </tr> <tr> <td>アクリマソン</td> <td>小久保 ネイダ</td> </tr> <tr> <td>カーザベルデ日本語校</td> <td>村 田 一 二</td> </tr> <tr> <td>アラサツーバ日本語校</td> <td>渡 辺 次 雄</td> </tr> <tr> <td>スザノ文協日本語教室</td> <td>安 江 信 一</td> </tr> <tr> <td>あすなろ学園</td> <td>角 美恵子</td> </tr> <tr> <td>光 学 園</td> <td>日 松 敏 子</td> </tr> <tr> <td>ピラチニンガめくみ日本語教室</td> <td>佐 藤 君 子</td> </tr> </table>	松柏学園	川 村 万里子		上 田 きよ子	アクリマソン	小久保 ネイダ	カーザベルデ日本語校	村 田 一 二	アラサツーバ日本語校	渡 辺 次 雄	スザノ文協日本語教室	安 江 信 一	あすなろ学園	角 美恵子	光 学 園	日 松 敏 子	ピラチニンガめくみ日本語教室	佐 藤 君 子
松柏学園	川 村 万里子																		
	上 田 きよ子																		
アクリマソン	小久保 ネイダ																		
カーザベルデ日本語校	村 田 一 二																		
アラサツーバ日本語校	渡 辺 次 雄																		
スザノ文協日本語教室	安 江 信 一																		
あすなろ学園	角 美恵子																		
光 学 園	日 松 敏 子																		
ピラチニンガめくみ日本語教室	佐 藤 君 子																		

年・月・日(曜日)	行 動 概 要
	<p>アクリマソン 高 橋 都 差 子 ツァルガス学園 塚 本 信 子 だるま塾 森 脇 礼 之 事業団サンパウロ支部長 平 尾 文 司 ・ ・ 業1課長 堀 口 進 一 ・ ・ 小 畑 豊 茂</p> <p>調査団(上原、橋本、岡田、栗田)</p>
10.14 (日)	<p>12:00 ARR 253にてサンパウロ発、イグアスフォール経由、15:35 プエノスアイレス着、CITY HOTEL投宿。</p>
10.15 (月)	<p>派遣日語指導教師合同研修会出席 於在亜日本人会館会議室(第1日)</p> <p>出席者 派遣日語指導教師</p> <p>中 山 博 (ボリビア) 外 村 誠 也 (ブラグアイ) 畑 本 久 信 (ドミニカ) 正 善 達 三 (アルゼンチン) 清 水 武 二 ()</p> <p>事業団サンパウロ支部 小 畑 豊 茂 日本大使館 伊 藤 稔 領 事 事業団プエノスアイレス支部長 永 田 良 三 総務課長 菊 池 賢 治 業1課長 筒 井 信 弘 永 田 正 務</p> <p>調査団(上原、橋本、岡田、栗田)</p> <p>協議事項</p> <p>(1) 各支部日語教育現状報告 (2) 学習指導の手引</p>
10.16 (火)	<p>研修会第2日</p> <p>フロレンシアバレー日本語学校訪問、授業参観、教師、運営役員、父兄と懇談 ウルキッサ日本語学校訪問、授業参観、教師、運営役員、父兄と懇談 ラブラタ博物館経由 プエノスアイレス日亜学院訪問、授業参観</p>

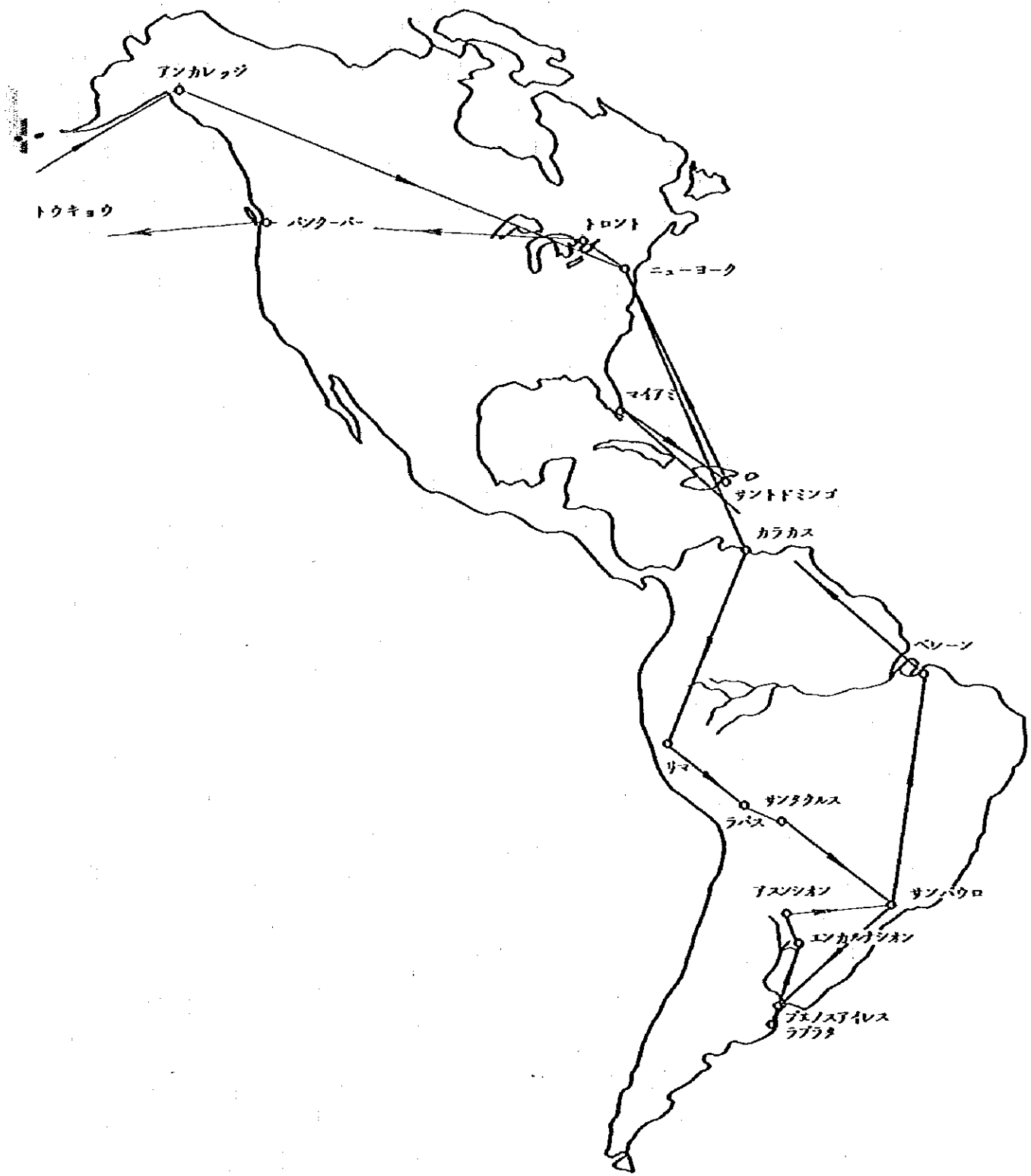
年・月・日(曜日)	行 動 概 要												
10.17 (水)	<p>研修会第3日目</p> <p>協議事項</p> <p>(1) 現地日本語教師の本邦研修について — 報告と意見交換 —</p> <p>(2) 日本語教科書の編さんについて</p>												
10.18 (木)	<p>08:00 ARR 712 便にてブエノスアイレス発、ボサダスにてエンカルナシオン竹中支所長外の出迎えを受けエンカルナシオン到着12:00。支所にて小懇ののち、フラム移住地へ。</p> <p>フラム移住地自治会事務所に於て懇談会(地元教師等13名、竹中支所長、森谷職員出席)</p> <p>フラム診療所視察、アルトパラナ移住地着17:30。松葉旅館投宿。</p>												
10.19 (金)	<p>午前中自治会事務所にて日本語教師と懇談</p> <p>出席者</p> <p>アルトパラナ移住地各地区日本語小中学校教師 13名</p> <p>ピラボ学生寮、診療所、アルトパラナ分場(パラグアイ農総試)、公園墓地を視察後、エンカルナシオン経由、アスンシオン着、アスンシオン支部安藤総務課長、川上兼1課長の出迎えを受け、日程打合せ。</p> <p style="text-align: right;">GRAN HOTEL PARANA' 投宿</p>												
10.20 (土)	<p>09:00 アスンシオン支部訪問、安藤、川上両課長より概況説明を受ける、大使館藤崎領事に挨拶。</p> <p>アスンシオン日本人会日本語学校授業参観、教師と懇談、三育学院訪問、栄田院長、高橋教師と懇談。</p>												
10.21 (日)	<p>イグアスー移住地着(16:00)、前川イグアス事業所長より、移住地概況日本語教育事情について説明を受ける。</p> <p style="text-align: right;">パ農総試研修生宿舍投宿</p>												
10.22 (月)	<p>午前中イグアス日本語小中学校授業参観、イグアス診療所視察</p> <p>午後日本語教師、教育委員等と懇談。</p> <p>出席者</p> <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 50%;">イグアス日本語小中学校</td> <td style="width: 50%;">矢 内 順 治</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">,</td> <td>島 津 裕 哉</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">,</td> <td>島 津 恵 靖</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">,</td> <td>西 森 公 代</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">,</td> <td>岡 林 洋 子</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">,</td> <td>矢 内 めい子</td> </tr> </table>	イグアス日本語小中学校	矢 内 順 治	,	島 津 裕 哉	,	島 津 恵 靖	,	西 森 公 代	,	岡 林 洋 子	,	矢 内 めい子
イグアス日本語小中学校	矢 内 順 治												
,	島 津 裕 哉												
,	島 津 恵 靖												
,	西 森 公 代												
,	岡 林 洋 子												
,	矢 内 めい子												

年・月・日(曜日)	行 動 概 要
	イグアス日本語小中学校 山 本 イグアス事業所長 前 川 洋 右 , 職員 吉 田 純 啓 懇談会終了後パラグアイ農業総合試験場視察
10.23 (火)	09:00 イグアス事業所発 ストロエスネル市より国境を越えてブラジル入国、 FOZ DO IGUACU 空港よりサンパウロ経由、23:25 ベレーン空港着 HOTEL REGENTE 投宿
10.24 (水)	09:00 汎アマゾン日伯協会における日本語教師研修会出席。 出席者 トメアスー日本語学校 諸 石 輝 雄 ア カ ラ , 長 瀬 隆 昭 モ エ マ , 増 山 秀 海 , , 増 山 和 恵 サンタイサベル , 国 分 伊 衣 , , 古和田 道 弘 , , 上 田 和 子 カスタニヤール , 兵 藤 信 子 , , 佐々木 邦 子 コッケイロ , 丸 岡 邦 子 ベレーンアドベンチスタ , 松 並 孝 次 郎 ドミニカ国派遣指導教師 畑 本 久 信 事業団ベレーン支部長 仁 科 彦 夫 , , 業務課長 緒 木 功 , , 職員 林 丈 一 調査団(上原、岡田、栄田) 研修事項 (1) 日本語教育の現状と問題点 (2) 講 話 (岡田、上原) 17:00 ベレーン支部訪問、仁科支部長より管内概況説明を受ける。
10.25 (木)	午前中ベレーン支部にて業務打合せ。 15:30 RIO 814にてベレーン空港発 20:40 マイアミ空港着 INTERNATIONAL AIR PORT HOTEL 投宿
10.26 (金)	12:55 EIA 041にてマイアミ空港発、14:50 ドミニカ共和国サント

年・月・日(曜日)	行 動 概 要																												
10.27 (土)	<p>ドミンゴ空港着、大使館小田一等書記官、事業団サントドミンゴ支部、小島支 部長、矢島職員の出迎えを受け日本大使館訪問、HOTEL LINA投宿</p> <p>サントドミンゴ支部訪問、小島支部長より管内概況、日本語教育事情について 説明を受ける。</p> <p>次いでドミニカ日本語学校サントドミンゴ校授業参観</p> <p>日本語教育懇談会出席 於HOTEL LINA</p> <p>出席者</p> <table border="0"> <tr> <td>ドミニカ日本語学校サントドミンゴ校</td> <td>上 原 邑 子</td> </tr> <tr> <td>・</td> <td>吉 元 澄 子</td> </tr> <tr> <td>・</td> <td>小 松 和 恵</td> </tr> <tr> <td>・ ラ・ペーガ校</td> <td>川 畑 澄 代</td> </tr> <tr> <td>・ ハラバコア校</td> <td>矢 内 愛 子</td> </tr> <tr> <td>・ コンスタンサ校</td> <td>神 前 和 子</td> </tr> <tr> <td>・</td> <td>西 尾 蓉 子</td> </tr> <tr> <td>・ 運営委員会委員長</td> <td>原 田 光 蔵</td> </tr> <tr> <td>・ 委員</td> <td>荒 井 理 元</td> </tr> <tr> <td>日本人会連合会日本語学校担当理事</td> <td>玉 手 秀 雄</td> </tr> <tr> <td>ドミニカ共和国日本国大使館書記官</td> <td>小 田 義 一</td> </tr> <tr> <td>事業団サントドミンゴ支部 支部長</td> <td>小 島 俊 朗</td> </tr> <tr> <td>・ 職員</td> <td>岸 忠 士</td> </tr> <tr> <td>・</td> <td>矢 島 厚 武</td> </tr> </table> <p>調査団(上原、岡田、栄田)</p>	ドミニカ日本語学校サントドミンゴ校	上 原 邑 子	・	吉 元 澄 子	・	小 松 和 恵	・ ラ・ペーガ校	川 畑 澄 代	・ ハラバコア校	矢 内 愛 子	・ コンスタンサ校	神 前 和 子	・	西 尾 蓉 子	・ 運営委員会委員長	原 田 光 蔵	・ 委員	荒 井 理 元	日本人会連合会日本語学校担当理事	玉 手 秀 雄	ドミニカ共和国日本国大使館書記官	小 田 義 一	事業団サントドミンゴ支部 支部長	小 島 俊 朗	・ 職員	岸 忠 士	・	矢 島 厚 武
ドミニカ日本語学校サントドミンゴ校	上 原 邑 子																												
・	吉 元 澄 子																												
・	小 松 和 恵																												
・ ラ・ペーガ校	川 畑 澄 代																												
・ ハラバコア校	矢 内 愛 子																												
・ コンスタンサ校	神 前 和 子																												
・	西 尾 蓉 子																												
・ 運営委員会委員長	原 田 光 蔵																												
・ 委員	荒 井 理 元																												
日本人会連合会日本語学校担当理事	玉 手 秀 雄																												
ドミニカ共和国日本国大使館書記官	小 田 義 一																												
事業団サントドミンゴ支部 支部長	小 島 俊 朗																												
・ 職員	岸 忠 士																												
・	矢 島 厚 武																												
10.28 (日)	<p>09:00 DO902にてサントドミンゴ発ニューヨーク経由16:45トロ ント空港着、斉藤駐在員の出迎えを受け、PRINCE HOTEL 投宿。</p>																												
10.29 (月)	<p>駐在員事務所にて斉藤駐在員より管内概況、日本語教育事情について説明を受 ける。</p> <p>日本語教師吉原作次郎氏私邸訪問懇談。</p> <p>日系文化会館における日本語教育懇談会出席。</p> <p>出席者</p> <table border="0"> <tr> <td>日加学園</td> <td>趙 京 子</td> </tr> <tr> <td>・</td> <td>丸 山 穂 子</td> </tr> <tr> <td>・</td> <td>山 口 洋 子</td> </tr> <tr> <td>・</td> <td>アユプリ.バレーナ</td> </tr> </table>	日加学園	趙 京 子	・	丸 山 穂 子	・	山 口 洋 子	・	アユプリ.バレーナ																				
日加学園	趙 京 子																												
・	丸 山 穂 子																												
・	山 口 洋 子																												
・	アユプリ.バレーナ																												

年・月・日(曜日)	行 動	概 要
	日加学園	山下 実 (校長)
	・	宮原 一雄 (理事)
	国語教室	田中 光子
	・	市田 隆子
	・	古保 隆代
	・	鈴木 美知子
	・	青柳 幸年 (理事)
	・	高木 広行 (理事)
	スカーボロ校	丸岡 障子 (校長)
	・	田場 国男 (運営委員長)
	佐藤定トロン日本語学校維持会長	
	トロント新移住者協会長	三枝 与一
	トロント総領事館蓮見領事	
	調査団(上原、橋本、栄田)	
10.30 (火)	トロント総領事館表敬訪問	
	資料整理	
10.31 (水)	10:15 AG105にてバンクーバーへ、12:00到着、バンクーバー総領事館柳瀬領事の出迎えを受けHOTEL GROSVENOR投宿	
	バンクーバー日本語学校訪問	
	教師と懇談	
	出席者	
	上山知雄、江川元明、高森瑠代、西村節子	
	同校で行われたHALLOWEEN PARTY(万聖節前夜祭)参観	
11. 1 (木)	バンクーバー日本語学校における父兄及び名誉校長佐藤伝夫妻を囲む座談会出席。	
	次いでグラッドストーン日本語学校を訪問、授業参観並びに父兄との懇談会出席	
	夜日本語教師懇談会出席 於大同飯店	
	出席者	
	スティフストン日本語学校長	横山 勉 夫
		外教師5名
	バンクーバー総領事館	柳瀬 領 事
	調査団(上原、橋本、栄田)	
11. 2 (金)	バンクーバー総領事館表敬訪問、浅尾新一郎総領事に挨拶。	
	14:00 GP101にてバンクーバー発	
11. 3 (土)	16:55成田空港帰着	

2. 調査団行動図



第2章 要約と提言

1 要約

1. 我々中南米及びカナダ移住者子弟日本語教育調査団は国際協力事業団の委嘱により、土原輝男（玉川大学教授）を団長として、昭和54年10月3日成田空港を出発、同年11月3日帰国まで32日間にわたり調査を実施した。
2. 調査対象国はベネズエラ、ペルー、ボリビア、ブラジル、アルゼンチン、パラグアイ、ドミニカ、カナダの8ヶ国、日本語学校訪問19校、外国系学校（ドイツ、フランス、イタリア）3校、教師、教育関係者、父兄との懇談会17回に及び併せてブエノスアイレスにおける派遣指導教師合同研修会に出席（3日間）した。
3. 父兄・教育関係者の日本語教育に対する意識は総じて極めて高いがその捉え方、狙いは様々である。

大要次のように分類できよう。

1. 外国語としての日本語（知的、合理的アプローチ）
 - (1) 実利的……日本企業に就職、ないし語学教師希望
 - (2) 文化的……日本文化の導入理解
2. 母国語的意識（情緒的アプローチ）
 - (1) 日本語を忘れないため
 - ア. 無自覚的、消極的 — 大勢順応
 - イ. 自覚的
 - a. 日本人としての identity の確認
 - b. 家庭内での世代間のコミュニケーション
4. 大抵市においては、教師は文字言語教育のテクニックの向上に力点が入りすぎ、児童のおかれている言語環境や言語獲得過程、児童の精神発達に対する配慮が無視されがちである。従って教師としての経験・能力が豊かであつ教育設備、教材等の外的条件が比較的良好に整備されているにも拘わらず、言語に生活感覚が伴っていないため児童の日本語獲得能力向上の期待は絶望的であらう。
5. 移住の新しい奥地集団移住地にあつては、家庭、地域とも、日本語としての言語環境に比較的恵まれており、日本語教育という名のもとにむしろ現地初等教育の補習的意味合いが強く、二重母国語（Bilingual）獲得の可能性をもっている。但し、教師は使命感をもつものの、教育に対する自信がなく孤独感を抱いている。
6. 移住者には、深刻な運命的人生と真向いになった精神と態度がある。そのことと結びついた一つが日本語であるにもかかわらず、その対策は語学的にだけ、処置されている。
7. 日本語獲得の方法に、父兄・教師たちが、かつて日本に在つて、小学校国語科教育で学んだイメージが強くて、その通り行えば効果があるものと錯覚していること。

8. 父兄は、勤労に忙しく、子弟はまた、現地初等教育と、日本語学校に通学するため、(またその通学距離も甚しく遠く、バス送迎も巡回式の故に、早朝に出て夜に入りて帰る状態)遊ぶ時間が失われているばかりか、年齢を超えて多くの人と接触する機会に恵まれていないから、情報量の不足で、言語能力は停滞せざるを得ない。

2 提 言

1. 移住者子弟の日本語教育に対する施策を抜本的に改革されるべき時点に達していること。
2. 移住者子弟の日本語教育に対する施策は、地理的条件を異にする地域別によって用いられるべきこと。第1は、国際協力事業団直轄下にある移住地、及びそれに準ずる奥地移住地、第2は中・小都市、第3は大都市を対象として、各々施策を異にすること。従前の如くこれらを区別なしに抜くのは、移住という時間的な存在にともなっている言語対象に対する施策とならず、そればかりか、それぞれ異質に体質化しているだけに、互いに無益な混乱を生じ、失われた時間の記憶のある者ほど対策を求める声が大きいため指導理念及び方法がそれに引きずられて逆転顛倒し、遂には移住にともなう言語施策から逸脱して了うからである。
3. 2項に従い、日本内地の文部省検定国語教科書の配布は、第1地域に限られるべきこと。第2地域は現地からの要請に応じて行うこと。“国語”教科書があることによって、文字言語の指導にしばられ易く、言語発達の自由な開達さを失うからである。
4. 2項に従い、指導教師の派遣にあたってはボリビア及びパラグアイと、アルゼンチン、ドミニカと各々区別して言語教育の経歴分野に配慮を加えること。
5. 可能ならば、青年協力隊をして言語、体育、芸術等の課外活動を集団指導的に補充するため、対象国に対する人員の増大を図りその活用で言語活動を活発ならしめるよう努めること。
6. 国際協力事業団には極めて重要な移住者子弟の教育問題を扱う体制に欠けており、実効を期待するには、一歩突込んだ常に専門的な状況把握と検討が必要と考えられる。そのためには研究機関の設置が望ましいが、少くとも特別嘱託ないし専門職員の配置が必要である。移住者子弟の日本語の問題は、単に語学対象としてでなく、移住に伴う言語変動を如何に捉え、如何なる方向を得させることが、移住の目的に適うかが問われているとすべきであった。これは簡単な善後策や一時の措置であってよいものではない。仮りに言語問題に執着するとしても、移住者子弟を中心としたBilingual研究は不可欠である。
7. 派遣指導教師と現場教師との関係を明確にすべきこと。
8. 移住者子弟の言語教育のためのテキストは、そのための調査研究グループを設け、又は研究機関に委嘱して編集せらるべきものであること。
9. 現地日本語教師の本邦研修は第1、第2、第3各地域よりの混合のまま行うのは研修効果からみて疑問なしとしない。第1地域を重点とすべきであろう。
10. 現地日本語教師の本邦研修人員の増加を図ること。

11. 同時に、現地における地域別の研修会を実施し、多くの現地日本語教師に研修機会を与えること。本邦研修対象者は、この現地研修会出席者の中から選定することが望ましい。
12. COLEGIO ALEMÁN に準じた日本学校（現地教育制度に則り、日本の近代的な教育科学の成果を導入する）の設立についても検討すること。
13. 移住者子弟の日本語教育調査団は、第2次として継続されるべきこと。第2次目的とした調査課題は二言語併用の在り方の実態調査が中心で、そのためにも第1地域が重点となる。併せて、ハワイ米国西海岸等在外における伝統的な日本語教育実施地域及びブラジル南部奥地域も現況を把握しておくべきであろう。

第3章 調査概況

— 対象把握の方法と問題の所在 —

この度の調査対象を次のとおり分類してその問題の所在を明らかにしてみたい。その理由は、中南米及びカナダを含む8ヶ国の移住者子弟の日本語教育調査（以下「日本語」は「日語」と略する）は、その調査対象の膨大さ、その多種多様さはよって一概に述べられるものではないからである。

条件的に次の6条件が考えられる。

1. 地理的条件 — 大都市、地方都市、奥地等。
2. 移住形態条件 — 集団（家族を単位とする比較的大規模な集団入植地形成）。
単独（家族又は単身の雇用移住 — 散在）。
縁故（近親呼寄）。
3. 移住世代条件 — 戦前、戦後、越境。
4. 家族構成条件 — 三世同居、核家族。
独身—独居、混血（父親日系、母親日系）
5. 受入国移住及び文教政策条件 —
開放的=奨励
閉鎖的=拒否
選別的=職種別受入れ。
6. 日語に対する意識条件 —
日本文化導入型（高度成長した母国日本文化を導入したいとする目的意識）
就職型（日本からの進出企業に対する就職のための実利意識）。
親子型（親子のコミュニケーション意識）。
日系人教育型（日系人としての血縁を特徴として捉え、移住国のために貢献する意識）。

これらの諸条件の差異あるいは混合によって様々な現象となっていると思われる。以下その主だった現象を1、2、3の各条件について述べてみたい。（4、5、6については今回の調査では資料が充分得られなかったので割愛する）

まず地理的条件による大都市型について、例えばリマ（ペルー）、サンパウロ（ブラジル）、ブエノスアイレス（アルゼンチン）、トロント、バンクーバー（カナダ）には共通の特徴を見ることができる。その都市の転機をどこに限るか厳密にはむずかしいが、これらの都市で起っている日語に関する現象として、非常に情報が早いために、教師、親の意識が現代化されている。そのために教師主導型ともいえ、知識としての言語教育が行われている。従って教師の授

業法も現代的な感じがするものの、児童の学習レベルはそれに伴っていないで、上すべり、空まわりしていることが誰の目にもみえる。

次に地方都市型の例として、サンタクルス(ボリビア)、エンカルナシオン(パラグアイ)、サントドミンゴ(ドミニカ)を挙げてその共通性を指摘すると、地方都市(サントドミンゴは一国の首都であるが、規模、おかれている地理的条件から地方都市のカテゴリーとした)の特性ともいうべき中間的現象を示している。教師、父兄、児童ともに大都市追従的で換言すれば惰性的ともいえる。こういえば非難しているようにも聞えるが、創造性、躍動性に欠けるとも、それなりの安定感を示すのもこの範疇である。

次に奥地型の例として、サンファン、オキナワ(ボリビア)、フラム、アルトバラナ、イグアスー(パラグアイ)、第2トメアスー(ブラジル—但し未調査)を挙げる。以下に述べる移住形態条件、移住世代条件とも関連するが、父兄の教育熱は他のいずれよりも、手固く、しかも協同的で執拗的でもある。それだけに、現地の公立学校教育に飽き足らず不満の念のあることを被おうとはしない。日語学校に、父兄自身が往時の我が国の小学校の思い出を再現しようとするかに見えるほど積極的姿勢を示す。但し、ここにも短点があって、学校教師がそれぞれの地区により、にわかづくりに仕立て上げざるを得ないためもあって父兄会が学校運営、学校教師のイニシアティブをとっており、学校教師もまた、教育に関し専門でないという謙虚さもともなって、これに従属的となっている。児童も又、共同連帯感を基調とするコミュニティに住み馴れているから、雰囲気は学校というより、むしろこよなき集会場であり、日本では既に見ることのできない大正期若しくは明治期の小学校である。異なるのは、威厳のある校長や固苦しい先生が存在せず、恐らくは、各家庭の両親や年の離れた兄姉よりも怖くない小父さん、小母さん、もしくはお姉さんがいることである。

以上の現象は、移住形態条件が、集団で行われ、同時期に計画的に入植したという条件が大きく作用していると思われる。子供たちは屈託がなく、明るく、のびのびしていて、暗さは見当らない。しかし、学習効果となるとやはり駄目ざるを得ない。

他に移住形態条件の単独、移住について言及すべきであるが、広範囲の散在のため、今回は報告できるほどの資料は得られなかった。

次に移住世代条件を、戦前、戦後、継続と三大別すると、またこれによって、それぞれ現象を異にするように思われる。

戦前移住地としてリマ(ペルー)を代表としてとり上げると、日語習得熱は意識的で、何とかせねばならぬという思いが先走っていることがよくわかることである。戦前移住ということとは、移住の長年月にわたる歴史があるということであり、一世から二世、二世と三世、四世等々の人間維持関係を示しその世代毎に顕著に意識を異にしている。特に、太平洋戦争をこの歴史の間に持つために、日本人としての identity 越え、特にその一つとして日語放棄時代の後遺症をよくもわるくも露呈している。一世は日語教育に断絶のあったことを最もよく知って

おり、それだけに、再興意欲に執念を燃やしていることが感ぜられる。二世は先の理由によって日本語は身につけておらず、日本語の継承は三世をとび越えて、二世、四世の学習対象となっている。例えて言えば、一世は移住の苦難、戦時の圧迫をどうにか切抜け、世代が変わって一線を退き隠居する身となって、孫を膝の上に抱いてみたとき、日本語で会話できぬ淋しさを味合わなければならなくなっていたということであろう。また、この地ではそれ故一家三世代揃っての団樂はみられないとも言われる。一世と二世とが辛うじて日本語を話すときは三世はそれに加われず、二世同志若しくは二世と三世の会話のときは、一世が話に参加できないというのである。

このことばの不都合さを除去したい気持が日本語学習に意識的にかり立てることは察するに余りある。しかも、都会地である要因もあって、学校教育に依存することになる。

しかし、池の水も、新しい水が流れ込まない限り、池の水は蘇ることをしない。結局、後続移住者を迎えない限り、移住一世の母国語継承は極めて困難事となる。ましてやその間に戦争のようなあらゆるレベルでの交流の新絶期を持ったりすると、意識的に言葉の復活を望んでも、容易ではない。

戦後移住の条件による例は、既に集団移住のところで述べたので省略する。

継続移住の条件をもつサンパウロ(ブラジル)、ブエノスアイレス(アルゼンチン)、バンクーバー、トロント(カナダ)を例にとると、次の如き特徴を見出すことができる。

これらの地域は戦前、戦後を通じて継続して移住が行われているので地域的にも家庭的にも日本語の環境に恵まれていて、日本語学習は移住者が意識的にせよ無意識的にせよ当然必要とするところと考えているように見受けられる。比較していうなら、先のリマにあったような悲壮感や、切羽つまった感覚はなかった。急激な変化ではなく、スローテンポで推移して行くからであろう。一般的には教育方法の旧式化が目立ち依然として消性的な習得方法が改められていない。但し、以上の土地柄は大都市であるから、日本からの情報取得は早く、日本の風俗に同調する姿勢が強い。「外国語としての日本語」という言い方を最も多く聞かされたところである。都会地だけに知識人が多く、独自の教育システムの開発に意欲的になりつつあるが、児童を対象としながら、語学的処理の方向に傾斜して、児童をとり残す懸念がある。

第4章 調査内容と考察

第1節 移住者(父兄)の日本語に対する意識・認識の実情

(1) 既述第3章の如く、「外国語か母国語か」そのいずれかに意識づけられることによってその状況を異にして来ているといえる。その意識化は、自覚的なるもの、無自覚的なるものを含んだままで、外国語とする側に立つ者、母国語とする側に立つ者との道離せられ、兩者それぞれが、その自覚的なる者として無自覚的なる者を吸引しながら結束しつつある状態と言えようか。

まず都市型について述べるが、第3章に於て既述のとおり、この地理的条件は、一方の移住世代条件とも重なることも、見落とせない言語と生活との関連性を示している。例えば、リマ、サンパウロ、ブエノスアイレス、トロント、バンクーバーに見られる都市化現象として、知識的、あるいは合理的に、言語問題を捉える傾向と、都市に現地市民と接触しながら生活して来た identity にかかわる経験と自覚とによって日本語教育を行おうとする。この点、言語は必ずしも、常に意識的に使用するものでもないのに、こうした思考傾向は却って日常性と乗じた語学教育に傾斜して行っている。

「日本語の風化は時間の問題である」と言ったのは、アルゼンチンに於ける日本人会の幹部たちであったし、「日本政府に改めて日本語普及のための経済的援助をお願いする」と言ったのはリマの一世達であり、日本語教育の目的に

- (1) 日本語を忘れないため
- (2) 日本語が使えれば就職その他で将来得になる
- (3) 日本人的感情を理解するのに役立つ

等々の発言をしたのは、バンクーバーにおける日本語教師たちであった。思えば、この種の発想なり、発言は奥地の集団移住地では、調査団の耳には殆んど入らなかったのである。

まずこのように、都市分散移住型ともいふべき傾向を指摘し得るが、更にこれは世代によって、この世代的特徴をあらわすのも、言語の本質から言って当然のことながら、それだけ日本語の退化現象をそれぞれの立場から見届けている証候であろう。

もっとも、移住地と関係なく、戦前移住の一世たちに、明治人特有の気風が、日本語対策に如実に反映していることは、先ず真先に書き留めておかねばならぬことである。

年老いても彼等は、他のどの世代よりもこの問題に対して、日本人たるの持持と、移住一世たる責任を果しつつしようとする。

ペルー中央日本人会副会長、橋田正三氏、カヤオ日本人会長山川宗英氏等はいふ。「日本語を教えるのは、規律正しき、正直、勤勉という日本人の長所を保持させるためである」と。

この橋田氏が名誉会長をつとめる小学校は今回の調査中、その本国政府文部省の公認小学校であることはもとより、「日本人小学校」の名を掲げる唯一のものであった。

因みに、この小学校の創立趣意書、並びに父兄会々則、細則並に校則修正趣意書の一部を引用して、その意図を理解する参考としたい。

○創立趣意書

吾人者茲に現下之在留同胞社会之情勢を觀るに精神的に意氣銷沈し吾が大和民族發展上必須なる教育方面之中心機能を失いつつある現状である。

此の秋に當り、吾等在留同胞は光輝ある二千六百年來の伝統的日本精神を發揚し以て相互に一致團結一丸と成つて現時の難局を突破して尙倍旧乃進歩繁榮を計る可く茲に有志相寄り吾等の二世教育事業に向つて邁進す可く思い茲に至れり。

賢明なる在留同胞諸士、發起者の企途に賛意御協力あらん事を。

昭和二十三年三月一日

發起者

(略)

○父兄会々則、細則並に校則修正趣意書

今や科学は大自然をも征服せんとしつつあり。即ち其のメスは世界の極地に迄伸び、亦高く宇宙の後方に達せり。

医学は天寿を引伸ばし、理学は人工雨を宴し、機械学は家庭生活の隅々迄にも及ぼんとす。時代の推移に順応し、文化を良く咀嚼吸収し、身心共に健全なる社会的家庭人を養育するに必要な学校たらしむる為め茲に父兄会々則、細則、並に校則の一部を修正する。

昭和三十三年五月二十三日

ビクトリア日本人小学校

(以下連名を略す)

報告者

創立の弁に、大和民族や、伝統的日本精神の語を扱ひ、有志相寄り二世教育を興さんという気概は、十年の才月を経た後者の修正趣意書の文面には片言隻句も見当らなくなっている。時代の推移の變貌の極端な轉換であつたとも受取れよう。その理由は何であろうか上原は何人かの日系人に質問してみた。

特に二十三年の創立趣意書に二世教育の文字が見えているのも、痛恨の思いがこめられているという。戦時下における二世は日本語を忘れ、日本人産れすることが溢み絵であり、そうすることによって國家に忠誠を誓う証とされた。いまやその子、その孫の時代となつた。親が日本語を忘れてゐるのに、どうしてその子、その孫が、日本語が流暢たり得ようか。調査団が耳に聴いた小学一年生の日本語学習は、「それなあに」、「(これは)鉛筆(です)」の受け答えですら、もはや、どう聞き直してみても外国人の口調、抑揚でしかなかつた。すでに、日本語としての音調がとれないことが痛々しく、先の戦争という文化破壊が単に物を壊しただけでなく言語伝承の断絶によって彼等のことばは幼い日本の子どもと同一には扱え

ない外国人のそれになっていたのである。

しかし、注目し、特記すべきことは、この小学校校則の第六条に「日本語の国語、算数の進度は、日本文部省検定教科書を標準とし西言語は当国文部省の指示に従う」としていることである。少くとも、校則修正が行われた昭和三十三年度においては、日本語の国語という言い方がなされ、その伝統とその意識が日本人学校の名称を残さしめたのにちがいない。

矛盾と断絶を如実に示している例の一つである。

これとよく似た事例としてカナダ・バンクーバー日本語学校がある。創立は1906年現校舎並びに会館落成は1928年で、この学校とともに生き、現在名誉校長であり、カナダ政府より表彰も受けている佐藤伝とその夫人であり名誉教師である佐藤英子は、当時を回顧してTHE NEW CANADIAN紙(1978.6.13付)に「かくて私共の大きな望みであった「教育王城」の建設があり、単に学童の教育を施し得るばかりでなく、学校中心文化運動にこの建物を利用することができるようになったのでした」と記している。

同校は秩父宮同起西殿下、三笠宮同起西殿下の各々奉迎式、十数回にわたる日本検閲部隊、運輸省航海手続船の文藝奨励中は、この施設を乗組員の休憩所に提供したり、現在もなお、東邦平八郎の書「開拓智能」や斉藤実の書が掲げられ、当時の繁栄を物語っている。

斉藤夫妻の言によれば、「この校舎、会館の建築前後より、太平洋戦争に至る十数年間は実に日本語学校の発展時代、全盛時代であり、その間、本校の生徒数は千名以上の多きに及び、太平洋沿岸数百の日本語学校中、内容、規模共に最大の学校であった」という。戦時下は学校閉鎖は言うまでもなく、日系人はすべて、百マイルの内陸に強制移動させられた。佐藤夫人は、「戦争中はお箸まで隠した」という。

戦争中の受難物語は此処だけではない。一例として紹介したのであって、その例としての所以は、その受難の刻印の強弱の度合によって、今日における日本語教育に対する在り方の違いを感じることである。

つまり、バンクーバー日本語学校の今日の在り方は、時移り、多くの人々が去り、現実に生徒数は減少し、調査団の耳にする子どもたちの日本語は、極めて稀少に、片言を話す優秀児の音声でさえ、なぜ、こんなにまで日本人離れすることができるのかと思わせるほどで、聞く方が辛く苦しいと言っても過言ではない。しかし、それでも老教師たちは、才月の流れに関係なく、かつての黄金時代もそうであったように、いささかも疑うことなく、日本人の子どもたちに接しているように映るのである。それは日本語を忘れてしまった子どもたちに、日本語を教えるという意識ではなくて、日本内地の保育係の保母さんのような接し方であり、生活共同体としての連帯感が横溢しているのである。

調査団の誰の目にも、耳にも、その効果は極めて疑わしいと感ぜざるを得なかった。それでも教室での教師たちには効果に対する懐疑や失望の色は見受けられずむしろ楽しそうかつ真剣であるのには、考え込まされた。また子どもたちは日本語が出来る出来ないとは関係

なく、子どもたちなりに楽しげであった。おそらく、此処の子どもたちは、かつて親が通ったであろう「教育の王城」とまではともかく、日系人の集会所 (Japanese Hall) へ足を運んで、この地ならではの幼児期、少年期の過ごし方を過しているというのが、最も妥当な見方であろう。

もう少し附言するとすれば、旧家のお年寄りたちが、零落を感知しながらも、却ってそのことを騒ぎ立てることをせず、静かに家風を守る姿にも似ていると言えようか。リマのピクトリア小学校、またはホセ・ガルベス小学校を、仮りに錦の御旗を守ろうとする祖父の学校にたとえるとすれば、此処は平和第一の祖母の学校であったと言えよう。パンクーバー日本文庫とかつて称した書棚には、戦前の鶴外全集、蕨石全集がぎっしりと並び先に述べた東郷元帥の扁額の掛るのを見ていると失われた時間というより、伝統に生き続ける礎石を見る思いがしたのがいつわさる感想である。ただ、こうした一世たちの意図や教育力の域外に子どもたちは躍り出して了っていることを見逃すわけにはいかない。

もっとも、後述するが、カナダでの日系社会における特有の呼称である「新移住者」(戦後移住者)の在り方や、その子弟を対象とした新しい個人経営の学校は全く別扱いしなければならぬ。

- (2) 都市において、新しい要求にもとづいて新設された日本語学校は、見るからに、都会風で、古い伝統の重い足を引きずっていないところがない。先生も若く、新鮮で、軽快な感じがする。これらの学校に所属する先生たちはきまって「日本語は外国語なのでから」と言い切る。こうした割り切り方から出発しているから、かつての日本語教育にかかわる悩みや困難さとかかわりを持たない。果して、日系(外国)人だから、日本語は外国語なのだと言いつつ問題が残らないかどうか。国籍的にはそうであったとしても、日本人としての遺伝的資質(体質、感覚、感情、生活環境を含めて)を濃淡強弱の差こそあれもっている子弟だとするならば、少なくとも、日本語は、無差別的意味における外国語とは断じられない筈であるが、少なくとも教室での取扱いでは、外国語としての日本語を施すことだとしている。

この種の学校は、個人経営による私塾的なものが多いが、その連合体的な規模を持つ大きなものもある。視察したなかで、その大きな例として、リマのラ・ウニオン学校、サンパウロの松柏学園、ブエノスアイレスの日亜学院等が挙げられるが、小さな例としては、サンパウロのツァルガス学園、パンクーバーのグラッドストーン日本語学園を挙げておく。

最初のラ・ウニオンは、元同校の教師、白鳥幸子(現在、東京西町インターナショナルスクール勤務)の単独編集になる「わたしのほんご」(Mi Libro de JAPONES)八冊本、他に別冊「わたしのほんごひらがなかきじゅん」と漢字のテキストがあり、普通、白鳥本とも、白鳥メソッドとも呼ばれ、そのため、そのテキストの名が南米各地で知られている。

教科書については章を改めて後述するのでここでは省略するが、その教科書が白鳥メソッドという名とともに浸透しているということは、この教科書には懇切丁寧な指導書も各冊添えられているばかりでなく、図版、カセットテープ等々まで整備され、教授法を持っているからである。

教科内容だけでなく、校舎設備も、環境もよく、一見ただで極めて恵まれていることが窺える。事実、有産階級子弟の集まる学校として羨望の目でみられているようであった。

同じく、有産階級の子弟を集めた、所謂ブルジョア学校的発想で成功しているのに松柏学園がある。ブルジョア学校的発想というのは、その教育理念に文化の摂取、叙叙ということに基づいており、その現在の段階に多少の問題点があっても、豊かさを目指し、活動的であることは否定されることではない。同校訪問中に、生徒が自らが立てた茶を選びお厭加減を尋ねたりする。また他の生徒たちは賑やかに校庭で盛んに写生し、どの生徒たちの顔も明るく楽しそうであった。同校では音楽、図工などを情操教育としてカリキュラムに含め、日語教育の方も、昭和五十二年に、玉川学園に日本語能力検定のための標準テストの作問を依頼し、その検定試験を実施したりしている。上原は、ここで、この学校の卒業生で、現在、某大学日本語学科に在籍し、傍ら本校で助手をしている女性と話す機会を得た。特に本学園教育を受けて日語が堪能である方を推せん願ったのである。上原は次のように質問した。

「あなたは、日本語が大変お上手だそうですが、現在あなたが日本語について、この点がむずかしいとか、こうありたいとか考えられていることがありましたら、お聞かせ下さいませんか。」

一瞬、彼女は考えた風だったが、次のように答えた。

「早く話すべきときは早く、ゆっくりであるときに、ゆっくり話すことができません。」

我々は、頂門の一針を得たように思った。我々ばかりでなく、これらの知的、都会的発想あるいは文化的思考を基礎にした教育法は、もたつきがない代りに、生身で育つ人間感情を疎外するところがあることを知るべきであった。

このことは同時にリマのラ・ウニオン学校でかなり徹底した白鳥メソッドが行われているのに、教室を一歩出た子どもたちの間の会話に、その影響が見られないと、正直に述べてくれた教師のプロフィールを思い出さしめた。

知的理解と、感情の流鏝を音声に託すことの遠い近いを、二重言語を使用させるとするなら、一番大切な教育問題として考えてやらねばならぬことではなかったか。

外国語として学習する意識は既に知的理解の対象として、その言葉を認識することから始めていることのかたよりを、日語教育指導者はもっと自覚し、その構え方が、担当学習者の精神発達段階に適応しているかどうかの見極めが先決であることを反省すべきであろう。

都市型の日語校の父兄懇談会席上で、日語学校に行く時間になると、子どもが飯病をつかう。親の方もわかっているから、「そんならお便所に行ってからにしてください」というと「そ

れでは時間におくれる」と駄々をこねる等いう話は一度や二度ではなかった。日語学校に行きたがらない理由は様々あるにちがいないが、その大きな一つとして日語教育(外国語)が完全に語学教育として行われているからであろうと推察する。そしてもし、ここで日語学校欠席理由に、子どもが口実をいって困ると報告者も苦笑し、それを聞く同席者も笑う、その笑いが何に基くのか少しでも考えてみると、言語の能力とは、語学を習うことよりも、すぐ見破られる口実や駄々であっても、むしろ、それが精神年齢とともに駆使されている言語能力だということが、どうして感づけないのであろうかとも思えた。

しかし、都市における日語教育は、もうそんな細かい吟味を持しはさむ時期を疾く過ぎて、日語補習の名において鼓成のイメージをつくり上げている。あとは教師の充当の問題であり、教科書内容であり、そして効果を挙げる教え方如何だとするのである。

それは、我が国における進学のための予備校の拡大あるいは過当競争と似ている。それが本来的な教育であるかどうかを観ることを許さないまでに体制化しつつあるとあってよいだろう。

ブエノスアイレスの日本語教師集団は、中南米の中で最も精力的かつ行動的で、組織的でさえある。また亜国日報社、らぶらた報知等の報道関係機関もこれを援助し、日語問題はブームの観があるといっても過言ではない、この遺産醸成の陰には、各界関係者の多大の努力が払われたことであろう。我々調査団にも、アルゼンチンの日語熱の高まり、何よりもそのことは日亜両国の相互理解に役立って行くに違いないと思わせられる。昭和五十四年度からはブエノスアイレス大学に日本語講座が開講され、海軍省でも将校を対象に同じく開講されたという。

当然この地で最も伝統ある、1927年創立の日語学校(ブエノスアイレス日亜学院)が、日系小学校の復活実現を打ち出し、南米各国各地略共通の、午前中は当国の公立小学校に通学し、午後は一週三日程度それぞれの日語学校に通うという二重構造からの脱却を力強く推進して、1980年度開校を目標に、鉄筋コンクリート校舎の第1期工事を終了している。

章を改めて、この二重構造からの児童脱却については後述したいが、この地における街のブームと、日系小学校復活とは目的を必ずしも一つにしない筈である。日語学習及び日語研究の語学的関心の高まりの過程あるいはその結実として、日系小学校の誕生を考えることには、論旨の乱れがあるといわれなければならない。我々報告者も日系小学校の誕生を希求し、又その必要を説くものである。但し、語学教育の目的のために、日系小学校が必要なのではない。児童のより健全な発達のために、委財的な小学校を復興させるにある。このあたりの原則論は、勿論、日亜学院の関係者たちは討議を重ねておられると思うが、時勢というものは、目的と手段の転倒を起しがちであり、一方で外国語としての日本語教育が喧伝され、そのための研究会などが活発に行われているだけに、心配するのである。

日亜学院の授業も拝見した。明日の希望を持つ先生方の授業ぶりは熱が入り、その声は互

いに隣室にまで響いていたが、子どもたちの表情は特別勝れているとは言えなかった。

但し、日本内地の国語教科書を使用する外国語としての日本語学習が、子どもたちの顔を輝かせると思う方が無理なのであろう。

子どもの興味を引きながらの日本語学習となると、個人経営で少人数相手の、こじんまりした私塾的な学園の方が生き生きと楽しそうに映った。サンパウロのヴァルガス学園、カナダ、バンクーバーのグラッドストーン日本語学園がそれである。まさに教師の工夫によって磨き上げた技倆を生かして子どもたちを抱擁している様で、見ていて微笑しい。劇を折り交え、時には歌唱し、巧みな話術で、子どもの発表を聞いていると、それなりの成果も上がっていることが理解される。

決してこれらの努力を過少評価したり、或いは全く否定してしまうつもりはないが、やはり、こうした外国語としての日本語学習をすることによって、子どもたちの生活に、どんな変化が起きているのか、または、幼少年期における二重言語獲得の在り方の模索がどうしても欲しいと思うのである。

(3) 続いて、奥地集団移住地の日本語教育につき父兄の意識を中心にその実情を述べてみたい。

調査対象の代表例として、ボリビアのサンファン移住地、オキナワ移住地、パラグアイのフラム、アルトパラナ、イグアス各移住地を挙げる。

これらは国際協力事業団の直轄移住地としてボリビアは昭和三十年より、パラグアイもフラムは同じく昭和三十年、アルトパラナ、イグアスは昭和三十五年以降の入植である。

在留邦人及び日系人数は、ボリビアの移住地には2,480人(1975年10.1現在、国際協力事業団サンタクルス支部「管内概況」より)、パラグアイの3移住地に3,695人(同アスンシオン支部「業務概要」より)で、これと約同程度程度の現地人がそれぞれ居住しているといわれる。広大なそれぞれの移住地に1校ないし数校あって、事業団が校舎を建設し(スペイン語学校として)、当国政府に提供、当国政府より配置された教師には、当国政府負担による給与とは別途に、事業団が謝金を支給し、なおかつ設備教材等の経費を助成して当国の義務教育が行われ、日本語教育はその放課後、その校舎を併用して行われている。一般にこれを日本語学校と呼んでいるが、担当教師は、地元の教師経験者およびそれに準ずる人々で授業科目は必ずしも国語(本来ならばこの言い方は外国語、もしくは日本語と改めなければならぬが、現地では、日本内地における意識と変りないからこう呼び、むしろ義務課程の国語であるものをスペイン語と呼んでいる)に限らず、算数、社会、音楽、珠算等を行っている。

第1表 ポリビア、パラグアイにおける集団移住地日本語学校概要

国名	移住地名	面積	入植者数	学校名	開校年度	教師数	生徒数	備考			
		HA	人		(西)年	人	人				
ポリビア	サンファン	27,132	1,139	サンファン日本語学校	1969	7	213				
	オキナワ第1	21,800	659	コロニアオキナワ 第1小中学校	1960	7	143				
	オキナワ第2	16,744	430	第2小中学校	1960	7	178				
	オキナワ第3	8,333	252								
パラグアイ	フラム	16,056	1,940	ラバス日本語小	1963	3	51				
				富士日本語小	1975	3	48				
				サンタローサ日本語小	1961	5	63				
				フラム日本語中	1964	2	50				
				アカカラジャ日本語小	1963	6	72				
	アルトパラナ	8,4217	1,654	ピラボ日本語小	1964	3	55				
				富美村日本語小	1964	3	48				
				ピラボ中央日本語小	1976	4	43				
				・ ・ 日本語中	1977	1	37				
				ピラボ日本語夜間中	1972	3	156				
				イグアス	87,762	1,001	イグアス日本語小	1978	8	107	
							イグアス日本語中	1978		40	

備考：パラグアイではその他チャベス、アマソバイの集団移住地にも日本語学校がある。

これらの地域では、いままで透べて来たような都市のそれとは全く立場を逆にして、日本語が主導権をとっている。というよりそれが極く当然の、自明の意識世界の中に人々は生活しているというべきであろう。

「日本語に関心が少ない人が多い」とアルトパラナ移住地のドイツ人神父が強く指摘したりしたが、調査団はそれを聞いて、却って日本語が母国語として生きていることの確認をもしたのである。英語で母国語を「母の舌。(Mother tongue)」というが、これらの地域の人々は親も子も含めて、同じように母の舌から聞いて成長しているように思える。

従って父兄も子どもたちも、日常会話に日本語が事欠くなど思ってもみていない。但し、先程のドイツ人神父の言とはうらはらに、ポリビア、パラグアイ両国のこれら戦後移住地の人々は、学校教育に対してかなり関心と期待を寄せている。だから、これらの地域は、日本語学校と称するものの、現地の義務教育に対する物足りなさや不安をいくらかでも除去するための補習校なのである。かといって現地の義務教育課程で学習する科目の予習や復習を怠修するために行ったりはしていない。完全にそれとは別個に、日本内地で父兄たちが経験して来

た行動での補修である。父兄たちの現地教師の力量に対する不満、勤務振りに対する不満やあきらめが強いだけに、日本語学校という名の補修校に期待を寄せている。この現地校と日本語校に対する受け止め方は、既に主客顛倒が起きていると云ってよい。

ただ、現地では一般に、現地の義務教育課程の方を西語教育又はスペイン語教育と呼び慣らしているのは注意されることである。

片方を日本語教育と呼び慣らして来て、それに対するものとして出て来た名称か、もしそうであったとしても問題を感じさせることばであろう。教科は西語（国語）だけではないはずであるから。

都市とはちがって奥地（現地では通称ヤマ）の移住地の子どもたちの負担になっているのはいわゆる先の西語教育である。つまり母の舌（母国語）とは違うことば（外国語）を学習することが苦痛なのである。

流俗語「どうして英語やるの？」を借りて子どもたちの気持を表わせば、都市では「どうして日本語をやるの？」であり、奥地では「どうしてスペイン語をやるの？」となる。

極端な例として、サンファン懇談会では「スペイン語恐怖症に対する対策を」という発言もあり、これからもある程度察しがつこう。報告者はサンファンで、岡山出身の大家族構成の農家を訪ね、幼稚園前の三才の男の子と話してみた。全く、日本内地の同年令の子どもと変わらない応答する。

このように、日常会話に特別不自由なく成長して来た子どもは、就学年令に達すると、当該国の教科課程に沿った当該国の国語で展開される全ての授業に、その地域現地人より遙かに高い義務感と誠実さをもって堪え努力を始めるのである。しかし、ほぼ半数弱が日系人子弟であること、就学年令時の精神発達から考えても、また就学以前の現地人子弟との会話の経験からも、全く未知の外国語の渦中で、孤独、焦燥、嫌悪等々の不快感備に沈滞するとばかり臆測することは誤りであろう。ましてや彼等に、「君たちはどこの国の人間か」と質問すると、言下に、「ポリビア人」、「パラグアイ人」とびっくりするほど大きな声で元気よく答える。勿論、日本語で答えるのである。此地に彼等たちの運命的言語矛盾の介入がある。世の大人たち、関係者はここを考えてやらねばならない。また、海外移住にかかわる両国政府は、当然、移住行政論の中で理論的解決策を得ておかねばならない焦眉の問題であったのではなかろうか。

にもかかわらず、たとえばわが国における追いつけ追い越せの富国強兵策の一環として発動した義務教育という小学校設置と同じ発想を、これらの国々が唯一のように過信し、適用することは、今日的には、もはや教育に名を借りた過去の過った遺風の模倣であろう。教育を義務で行うという考え方自体、前近代的であったのである。とまれ、今日の義務教育制度は、移住者子弟が当然背負うべき、この運命的言語矛盾の傷口を開けはなしても、慰撫し、その活動力を助け、高めるとは思われないのである。

教師・教材論が基本問題のように考えるのは、学校教育の形式から出発した整備論で、それ以前の海外移住者子弟が運命的に言語矛盾を内包して来る人間の教育論とはなり得ないことを痛感させられるのである。

以下、二三の現地で拾ったそれとかかわる傷口と思われる現象を参考までに紹介してみたい。

現地教育で受ける算教には、子も父兄も泣かされているようであるが、とりわけて明確にそれを示すものに掛算九九の問題がある。

イグアスの四年生のある子は、お弁当の箸を休めて上原の質問に答えてくれた。私の姉は私が三年生のとき九九を覚えるときは日本語で覚えるな、スペイン語でのみ覚えよと言ったので、私は日本語の九九は知らない。それは、姉が三年生のとき日本語の九九を知っていたために現地教師に叱責された苦い経験から、殊にその徴を踏ませまいとしたということである。その姉は算教は特に得意で、先生より早く出来たという。その「秘密兵器」は日本語の九九であつたらしい。

それを教師に見破られてスペイン語で九九を言ってみなさいと言われ苦しんだことようであつた。

(注：例えば $5 \times 5 = 25$ は cinco por cinco são veinte y cinco となる)

まだ、スペイン語の日常会話も自由でないこの年令時に、スペイン語の九九を強要することはもはや教育ではなく暴挙でしかないと思うのは一人私だけであろうか。

これは、ナンファンの路白ざかりと思われる三、四年生くらいの男の子たちと交した会話の中でのことである。君たちは現地人の子どもと喧嘩することがあるかと尋ね、どちらが勝つかと気分を誘った。すると負けるという、理由はことばがわからないからで、じゃ、日本語でやればいいじゃないかと言うのに対して、それでは、相手がわからないもの……と言ったことには考えさせられた。この喧嘩相手の現地人の子どもというのは、この地域社会に住む日系移住者に雇用されている現地人子弟である。いわば平たく言って、旦那の子と使用人の子との間の喧嘩の仕方がこうだということは、一体何がこうさせているのかと考えさせられてしまう。日本人的人の善さか、思いやりを本能的に持つ国民性は異国に在っても温存するものなのか、それとも、この国は、父祖の国々ではなく、父祖の地とする現地人を立てる意識が、喧嘩の場合は日本語を控えさせる結果となるのだろうか。

更に、上原は、「向うが何を言っているのか君たちがわからなくなって負けるのなら、君たちは日本語で喧嘩したら、こんどは向うが何を言っているのかわからないんだから、向うが負けるだろう。一度それでやってみたら」とそそのかした。子どもたちの反応は、わあっと喚声をあげての哄笑であつたが、明らかに拒否的反應であり、またそんなことは考えてもみなかったという戸惑いの表情も示した。

こうした国民性の差異というのか、旦那的立場にある鷹揚さと、奉公人的立場にある侍手

知った振舞いとは、互いに立場を強調し合うものらしい。その意味では、一世たちに同化の意図は全く見えないどころか、「われわれは土人化する移民では意味がない」ときっぱり言い切ったPTA会長の卓見も首肯できるものであったし、「教育とは、親の感覚を子どもに移すことだと思ふ」の明言も深く胸を打った。移住者は自らがこうした哲学を持たなければ生きては行けないのだということをしみじみ思った。

異邦の地で子々孫々とともに生きて行くことの意味を一世は模索し続けていることが痛いほどわかった。彼等の教育熱心さが、内地日本人以上の理由もここに存在するにちがいない。日本語学校と称しながら、日本語に限定しないのは、日本語が心配ないからではない。特殊な環境から身を守り、身堅めする場所として移住者同士が互いに存在を確認し合う必要があったからではなかったか。それは移住者が姑息になっているからではない。それが証拠に、この子弟たちは日本人だというよりも、その当国人たることを誇らかに口を揃えていうように教育したのも、この親たちに外ならない。ただ、結束しなければその風土が持つ土着性に埋没して去うことを彼等たちは直観しているのかも知れない。先述の子どもたちの喧嘩のように、対等、あるいはそれ以上のいわば身分的格差（経営者と使用人）さえあるのに、却って土着性の故に髣髴知たる者を優位に括えるのも、どこかに肩身の狭さを感じて去う土地と人間性との深い因縁があるからであろう。

そんな思いにかり立てたものに、もう一つの出来事があった。ボリビアの沖繩移住地幼稚園の子どもたちと三々五々に会話してみて日本内地の子どもたちと比較し、その話しっぷりは殆んど違うところを見ることが出来なかった。ただ、あいうえお五十音の読み書きの授業があるのだけが、却って不安をそそられた。心なしか、さ・た・ら行音に日本音としてあやしげな音声が聞える気がしたからである。そんな場面が先にあったせいであろう。園児たちとの別れ際に、さようならの別れの声に対し、子どもたちは大声でそれに応じた。その途差、まざれもなく、日本人ばなれた、外国人の真似かとも思える「さよなら」という音声が返ってきたのである。

どうしてなのか、一体これほどどこからしのび込んで来たのか、ここに日本語が崩れ失われて行く原発点を見た気がした。それにしても現地人が日本語を習い憶えたばかりの片言のような音声を、移住者はなぜ逆輸入してしまうのか。

我々は改めて、ことばはよく知った者がよく知らない者に加担して行く性質をもつものであることを知った。それは間違った音声だといわれようとも、よく直せない者がいるとき、よく直せない音声の方に移行してしまうということである。言い方を換えれば、よく発音できない者に交わるためには、よく発音できない者が正しい発音になるのを待つよりよく発音できる者の方から自分の発音を捨てることの方が早い交渉権を獲得するという習性による。

特に子どもの場合、この習性は強く働くように思われる。子どもが外地にあって、その外国語習得が大人以上に可能なのは、外国語を学ぶ意識よりも、その土地の土着言語を嗅ぎつ

ける能力が高いことも、今後考えてみたい課題であった。これら移住者において、スペイン語恐怖症とでもいうべき子どもの例が述べられたが、それは公立小学校の教科課程の中での話であって、現地人との子どもの交わりにおいての話ではない。また、中学、高校と進むにつれて、日系人子弟は日常生活用語もスペイン語に交替させてしまうことが普通である。

これはサンタクルス学生寮(日ボ協会運営)を訪ねた時、舎監からサンフアン出身の女子高校生達は、日・西両国語ともことばでは不自由を感じないと自信をもって言い、男子高校生たちは日常会話でもどういふわけかスペイン語を用い、日本語を使うことに照れ臭さを感じているようであると述べたことは記憶に残った。

中・高生の言語がどのように発達しているかは、今回の調査では、この問題に的をしぼり切れなかったために、資料が乏しく、印象的な記述にならざるを得ない。

しかし約同数の現地人と交わる戦後集団移住地の社会で育つ日系人子弟が、中、高生ともなると、日・西両国語が日常生活において、自由に使い分けられるという。

この二言語併用(bilingualism)が等位型(coordinate)か、複合型(compound)か詳細な研究は今後の課題にしなければならないが、ランバート(W. E. Lambert)のいう分離型(separate type)または配合型(fused type)に分類する後者に相当すると思われる。つまり、彼等たちは、日・西両国語を生活に必要するのであって、それは二つの生活というより、一つの生活の中に二ヶ国語が混合あるいは融合しているのではなかったらうか。混合か融合か、この差異を大まかに見るか、後細に見分けるか、学問的には重要な問題だと思うが、混合か融合かの差異はあっても、それを包んだ一つの生活の中で二言語併用の生活が行われていることは確かで、彼等たちの表情の中に、言語コンプレックスは読みとれなかった。

(4) さて、このように述べてくると以上の戦後集団移住地の子弟たちの言語成長は問題を孕みながらも、二言語併用者としての言語世界を獲得しつつあることになる。

移住者の二世として、両国語に習熟することは、単純にして明解な算数的解答である。しかしこれに対して、悲観的な観測をする人々がいることも付け加えておかねばならない。

結論から言うなら、確かに日常会話程度ならば、二言語併用で、殆んど事欠くようなことはないが、一体、ことばができるとはどこまでのことをいうのか。実際、日西両国語で公文書などの読み書きが自由自在となると、極めて限られた人々になってしまうだろう。

このように二言語獲得に否定的な人は移住地社会の中にもいるし、移住者を見守る立場にいる人たちの中にもいる。実は、われわれが移住者子弟の日本語調査を目的とすることを知って、それならば、是非、ブラグアイのラ・コルメナ移住地出身の10才から13・14才までの人々に会うことであること。その人々の日本語能力の高さの実際見聞者、または、その体験者は、熱心にわれわれに訴へた。そのことは、ブラグアイ入国以前の他国において

のことであり、また、そんな話を告げられたのは一度や二度ではなかったのである。領事館でも聞いた。事業団でも聞かされた。日本人でも不可能な絶品の通訳をし、公文書の起案も可能だというのである。

われわれがパラグアイ入りに早くから期待を持ったのはいうまでもない。渡河という言葉のために存在するような赤い大河パラナ河であった。この大河がアルゼンチンとパラグアイの国の境であった。実はボサーダスで、対岸エンカルナシオンの事業団支所からの出迎えを受け、この出迎えの中に、先のコルメナ出身者の最も話を聞きたい人が混っていたのであるが、初対面では知る由もなかった。エンカルナシオン支所に入るや、われわれがラ・コルメナ出身者を求めたことはいうまでもない。支所内勤務で、三人の高校出たばかりの若い女性を紹介されて、早速数分間の対談をテーブルに収めた。隆かな日本語であり、事業団で執務できることも十分に頷かせる。この時、最も年上と見られる女性が、日本語が堪能になった原因に、何が考えられるかという問に対し、暫く考えたのち、小説を多読したことかと答えたことと、日本流行歌は大好きで歌うというので、歌詞がわからないことばがないかという問に対して、「愛い」ということばがわからなかったと答えたことは、この子たちの日本語の水準を示しているといえよう。

アルトパラナ移住地の松葉旅館に投宿した夜、われわれをボサーダスより運転して案内して呉れている人が、われわれの会いたがっている人であることが知れた。その人は思い決めたのか、自ら名乗り出てくれたのである。昭和12年生まれ、当年12才である。誰の目にも、物静かに控え目な人と映るにちがいない人柄であった。

話を聞くにつれ、その静けさが、忘れ難い過去を持つ故であること、己れの運命を見つめる深い目ざしが、この人の行動を表立たせなくしている。いや、この世の栄光や、出世主義、功名心のはかなさを思うことの方が、上まざるのだと思われた。話は、ラ・コルメナ移住地における大日本帝国崩壊の日の思い出より語り出された。彼は尋常科一年生であったという。校庭には学校重要書類といっしょに、児童たちの自分たちの使って来た教科書が積み上げられていた。火は点じられた。教科書がみるみるうちに炎に包まれて行ったのが、いまなお顔の裏に焼きついているという。録真影も火中に投げられた。内地より派遣されていた校長先生は、諸君、今日が最後だ、と一言残して、馬上の後姿を校門の外に消した。それからの生活は急転直下、戦後の収容生活が始まった。物心ついた高校時代は(アスンシオン在住)、日本語を意識的にも忘れようとしたという。高校卒業後ラ・コルメナに移住した当時の彼は、口の汚いMと白眼視され、揶揄者だったという。日本語・日本人としての教育に熱心な父との激しい衝突のあったことも想像させられた。その父は1964年、帰国、静岡で小学校教科書を集めて持ち帰って、ラ・コルメナ移住地の日本語教育水準の維持につとめた人という。

ある時代は日本語を捨て、日本人離れにつとめた彼が、いまは指折りの二言語併用、いや

パラグアイは、現地語グアラニー語があるから、三言語併用者たり得ている。その原因を求めると、彼は静かに首を振った。どれもこれも中途半端なものばかりだと笑った。この判定は困難というより、ことばができるできないは、規準をどこに置くかであり、所詮ことばの到達最終目標などあるわけではない。M氏のこの中途半端だという笑いも、多分に謙遜からというより、御自身の過去に対する悔恨と自嘲から来る賢さを受けとれた。勿論、M氏に罪過を背負う過去があるわけではあるまい。言うなれば、M氏は、自己のアイデンティティを求めて揺れ動いた半生を凝視する余りであろう。

それが証拠に彼はきっぱりと、しかも誇らしげにこのことは言った。私は日本語の教師はやらない。私は六年前に少年野球チームを結成して、いまその団長であると。彼は、日本語学校で指導する日本語よりも、生活の場における心身活動とともにある日本語の方が有効であると悟っているにちがいない。あるいは、彼もまた彼の父の子であり、方法こそ違え、後進の指導に意欲を注ぎ始めたのにちがいない。

われわれは再びサンフェンの地で、教育とは、親の感覚を子どもに移すことだと明言した一世の横顔を思い出していた。このM氏はパラグアイ人を妻とし、一旦は父に反撥し離反したが、いまは、親の衣鉢を受け継いでいるといえる。

M氏は移住者の生き方として、個人を超え一世より二世へ、二世から三世へと生き送ることに意義を見出したのだと思う。M氏は休日毎に、その野球チームとともに在ると始めて童心に返った笑顔を見せてくれたのである。

ついでに記すと、こうした考え方は、ひとりラ・コルメナのM氏だけではなかった。ブラジル・ベレンで、われわれがある機会にこの話をすると、国際協力事業団ベレン支部長は、アマゾン奥地の青年会の在り方がそうだと述べられた。その青年会規則には、第1条 会合は日本語を用いること。第2条は子どもと遊んでやることとある由であった。

(5) 残されたもう一つの地域、大都市でもなく斜辺の奥地でもない中小都市の現状について述べてみたい。これらの都市はボリビアのサンタクルス、パラグアイのアスンシオン、ドミニカのサントドミンゴ等である。

これらの都市で感じられる最も印象的なことを一口で言うなら、よくもわるくも、開発途上という表現が適うような活力を感じる。

とにかく上向きの姿勢を濃厚に感じさせる。

従って、この地域の人たちは、子どもたちの日本語の出来不出来にそれほど神経をとがらさないし、それよりもむしろ教育行政的解決を考える。調査団が出会った人たちの年令がそういう風に社会情勢的判断を第一に考える傾向の年代に集中していたからとも思われるが、40才前の父兄、産官関係者たちの自信に満ちた言動は、開発途上国の印象と相俟って頼もしかった。

特にサンタクルスの父兄たちは、家庭で日本語を話しているのは20%あるかないかであろうといひ。生活習慣は日本的なものを残すことに意味があるが、日本語は既に外国語なのだから、その扱いの指導をすべきであると割り切ったものの考え方を示す。或る父兄は、家庭内では日本語使用を断乎堅持して来ていたが、子どもが上級学校に進学してスペイン語で苦しんでいるのをみてから解禁し、自由にしたと述べた。

また、このサンタクルス市内にはドイツ学校 (Colegio Alemán) があり (1937年開校、教師数50名内西ドイツよりの派遣教員7名生徒数約1,000名、'79年度西ドイツ政府運営費補助8万ドル — 人件費補助を除く —)、それにならい群小の日本語学校の援助よりもColegio Japonésを創設すべきことを強調し、賛同する人が当地では少くなかったことを付け加えておきたい。

日本人の礼儀正しさ、節操、勤勉その他よき生活習慣は残し、日本語は外国語として指導する — 合理的実利主義であって、迷いが無い — 単純明快であるが、言葉も生活習慣であることを指摘しても、その辺りに気を留める父兄は見当らなかつた。

子どもにとって言語獲得は、合理的実利主義とは異様に、目の前の生活の中で行われていくことだけは忘れてはならない。

「行って来ます」と「只今」がひっくり返って言われたり、「ジャンケンポン」が「ジャンクスポン」で、現地人子弟もともにやっていると聞いたのもサンタクルスであった。日西合成語が誕生しているということである。

二者択一や、外国語としての日本語の指導と気負ったり、論理づけを行ってみても、子どもは(対象が子どもである限り)、生活に必要な手近かなところからしか学べないのである。

既に述べる機会があつたが、子ども自体の日本語として、音にも狂いがなく、日常会話が堪能なのは、アスンシオン日本語学校の子どもたちであつた。他のサンタクルスや、サントドミンゴの子どもたちと比較して、日本人と外国人程の差異を見せつけるのはなぜなのか、その理由は今回の調査では究明できなかった。従つてアスンシオンは、この分類から除外して考えるべきと思つたが、父兄や指導者の考え方が同類なのでこの範疇に含めたのである。

音の狂いが、大都市で聞いた程でもないがやっぱりよく耳についたのは、サントドミンゴの子どもたちであつた。若干その発音ぶりを表記してみると

種類	ジュルイ → シウルイ
味合	アジアク・アジオク → アジアーク
場合	バアイ → バアーイ
加える	クワエル・クアエル → クオエール

の如くである。

このような音の狂いの方が、単語の数を多く知つていても、その使用言語がその人にとって母国語であるか、外国語であるかを自白しているようなものなのである。実は外国語の教

育を少し深く考えてみると、人間の音声に関する適応体系の転換を行わしめているということになるであろう。だとすると、この音が狂うか狂わないかの方が、単語一つ二つの習得の差より、もっと重要な教育内容であってよいはずなのである。しかし、これは、日本内地における外国語学習ですら、語学であっても、人間を相手にした外国語の教育の名にふさわしい内容と方法は行われていないのだから、ここでそれを性急に望むべくもない。しかし、一方で、外国語としての指導をしたいと言いながら、この音の狂いに大まかであるのは、矛盾であると指摘せざるを得ない。こういう自己撞着に陥るのも、ことばの学習は文字ことばの読み書きから始まると思込んでいるからであって、この意識の改変から、少くとも指導者は始めるべきである。

第二節 その教師・教材(教科書)・学習指導要領・派遣指導教師について

(1) 中・南米、カナダに於ては、地域に殆んど変りなく、正規の教員養成機関の卒業者、もしくはその資格を有するものが、それを担当しているわけではない。もし有資格者、または教職経験者がある中にいたとしたら偶然でしかない。決してその目的でその教師が集められ、採用されたり、選択されたりしたわけでもない。又、その教師とても、日本語教師を目的に、彼の地に渡ったり、その職業を第一目的として、彼の地で生い立った人たちではない。なかにカトリックの宣教師や修道尼が奉仕している例もみられるが、一般的には教師としては素人と言っていい人達である。

大都市などにみられる個人経営の私塾を除くと、大体、文化協会、自治会など日系の共同団体が運営委員会を組織して経営にあたり、その連帯的協同と責任において教師を確保しているばかりで、経営的に成り立つだけの地理的条件や経済力を備えているわけではないのほいいうまでもない。

日本語学校という以上、日本語教育の専門家を教師にと願うのは常識であるけれども、既に述べてきたように、日本語学校と称してはいるものの、そこに期待する中味は、先の分類地区によって必ずしも一定しておらず、仮りに、大都市における日本語の語学指導だけの専門家を、奥地の戦後集団移住地の先生に配置を想定しても、その地域社会からは歓迎される教師だとは言えない。何故なら、日本語教師である前に奥地では生活共同体の一員としての生業を保持し、児童教育者としての多角的なアプローチを要求するからである。奥地では公立小学校での補習授業の性格が強いのも、この故であろう。従ってこの逆もまた成り立ち、都市においては、奥地で信頼ある教師がすぐれた教師として評価されるとは言えないであろう。都市での日本語熱は盛んであるけれども、それは語学なのであって、技能として考えられており、学習者の年齢発達を中心とするものではない。

別な言い方をすれば、日本語学校の名称から言えば、都会地の方がそれに近く、奥地はその名称は仮りの名で、初等教育に重点がある。従って、奥地は教育者を必要とし、都市では

語学教師がよいことになる。また、これは、都市、地方の区別からだけ言えることではなくて、大都市では既に日本語が忘れられており、奥地では、生活言語が日本語であるということからも結果的にその傾向をもたらすものである。

都市における学習対象が、成人学教なら、特別言うことはない。その場合は短期速成的に、いわば自動車教習所の指導教育のように技能のマスターを目標に、その課程を卒える者、卒えさせる者を可とする考え方で一向差し支えはない。ただ、都市といえども、心身の発達過程にある児童を対象とする場合、そのような考え方は許されないだろう。調査団が出会った何人かの人、成人の方がさすが理解力があり進歩が早い。それに較べて、子どもの場合は、面白く、興味を惹きながら教えねばならず、苦勞しますという。こういう答えをする限り、教えておられる内容は同じだと推察されるし、異なるのは教授法だけが幼児向きに配慮があることを告げている。果してこれでよいのか疑問である。成人の方が理解力があり、進歩も早いというなら、成人になるまで日本語教育を待てばよいではないか——といえが極論のように思われるのであるが、教師が面白おかしく興味をひき出しながらやるのは苦勞であるというのは、児童の自発性がないのを一方では認めているということであり、この面白おかしくという苦勞は、教授内容を別にした誘導を意味している。日本では相当古くから、この誘導（導入）の上手な教師を、授業のうまい先生として賞め、教師として一枚上のように思われて来たから、今もって一般的に教師中心に進められるものだと思っている。いわゆる教科の初等なるものを行うという考え方が、児童の発達のために、教科を役立てるといふ本来性に立ち返ることを遅らせているのである。やはり児童を扱う限り児童教育の中で、外国語を取り扱うべきである。外国語のために学習を課するのではなかった筈である。

子どもが「どうして日本語をやるの」というその疑問に答える指導が、大事な外国語教育だと言いたいのである。

昭和五十四年三月五・六日、プエノスアイレスの日本大使館では、国際交流基金派遣による三教授が日本語教育講習会を開いている。「ら・ぶらた報知」紙は——三氏とも日本における日語教育の専門家、殊に外人留学生に対する経験の深いベテランとあって、その講演は極めて有益な内容に満ち満ちており、現地で日本語を「外国語」として教えている先生たちにとっては、大いに参考になったよう——と報じている。ところでこの三氏とも「私たちは外人留学生に対しての日本語教育で、直接児童には教えていない。しかし何らかの参考に——」（「かけはし」第1号（在亜日到語教育連合会刊））と断っていることを注意しなければいけない。この「かけはし」の編集後記に——日本の国語教育でなく、外国語としての日本語教育に、どこの国も切りかえつつある。アルゼンチンも例外ではない。まさに、日本語教育は曲り角に来ている。（正善達三記）とある。もとより、日本における学校国語教育と似たことでよいわけでもないし、言語環境の違いから行えるわけでもない。しかし、現在、内地で喧伝されている「外国語としての日本語」を児童に与えることが正しいとは思われない。

外国語としての日本語が標榜する意味はいろいろあるのだろうが、先述した子どもが、「どうして日本語やるの？」の不満は、どうしていま必要のない外国語をやるのかの意味ではなかったか。また日本人の外国語下手は有名だが、中学に入ってから、長く、かつもっとも時間をかけて行って来た英語は、外国語としての英語ではなかったのかと指摘しておきたくならう。

先の三氏も、児童を対象にしていなくて断るのは、専門を異にしていることだと考えてよいことなのである。

- (2) 現地で使用されている教材は、各国ともに教科書が主である。その教科書の大半は、日本内地で使用されている、小学校検定国語教科書を、流用の意識なく流用している。だからこのあたりにも、先の『外国語としての日本語』を都市では先取的に強調しながらも無意識的に『国語』と表記された教科書を使用させ、矛盾を侵していることになる。

これは、本当の教材とは何かという模索のために敢えて記したのであって決して現地の苦澁を理解していないということではないことをお断りしておきたい。

つまり、学校における国語であれ、外国語であれ、教師自身が過去の学習体験において、それを土台に考えるから、どうしても教科書なしの授業など発想として出てこない、あるいは、考えてもみたが、やはり、言語は言語体系があるのだから、それに基づく教科書によって学習する方が、効果があると考えてしまう。そこで能う限り優れた教科書を選択するのが、南米ならずとも学校教師の常識である。こうした考え方は、重ねて言うが、教科内容の精選が主となって、教科書と学習者との関係は一般的には、精選されたものは学習し易いとするまでで、児童の精神発達のために教科書は用意するという考え方にはなっていない。

例えば、仮りに教科書は『日本語は、いろは四十七文字から出来ている』とする。そうすると、日本語学習を始める人は、就学年令到達者も、五十の手習する人も同一の初心者用の教科書を使用していることになる。僅かにペルーやブエノスアイレスでは、成人学級が講かれているが、同一の教科書を使っている。成人の中には、太平洋戦争当時の日本語を捨てて意識的に日本人離れしなければ生きられなかった期間を持ったために、日本語を知らないことにおいては子ども同然である、という説明もできようが、前題で述べたように理解度は成人の方がよいということは、子どもが未だ持っていない何かを既に備えているからであろう。

母国語は、この子どもに足りない何かを充足させながら獲得して行くものなのである。もし、彼の地で共通認識みたいになりつつある外国語として日本語を指導するとなると、母国語の発達をまって、この足りない何かを充足されたのちに行う方が、無理強いにならないという論も成り立つのである。

ところが、こういう考えは彼の地では全く聞かれない。もう就学年令に達すると、そうすることが当然のように、現地の小学校に上ると同じように、日本語補習学校にも通学する慣習が生じている。

ちようど、日本内地の学習塾に通い、また通わせる心理と同じとっておこう。そうしないていることには或る程度勇気がいるし、また、そうしないていられない不安にかりたてられるからであろう。

その点、奥地の日本語学校にはこの心配はない。既説のとおり、日本語学校の講は、日本語で行う補習校の暗黙の了解があるからである。従って奥地では、僅かな特殊意見を除けば、日本内地で使用している「国語」の教科書に、それほど抵抗はない。察するに、日本内地と同様のものを使用しなくてはという希望もあることだろうと思う。

やや、余談めくが、某校を授業参観した折りに、光村図書出版の「三春駒」(小学四年)などを音読させられているのをみたりすると、風土の違いから、これは無理だろうと思ったりしたのも事実である。だが、日本内地では「国語」という教科を語学の時間と意識する人は少ない。ここでも、結局、子どもの意識を救うことが補習校として可能ならば、日本内地式の「国語」の教科書があってもよいわけで、むしろ内地の教科書の方が、児童の精神発達に準じる配慮がそれ相応に出来ているものだけに、それを使用してもよいのだと考え直してみたのである。

しかし、大都市では、ことばそれ自体に抵抗がありすぎて、内地の教科書「国語」が適当であるとは思えない。既に、生活言語としての日本語は失われてしまっているのだから、生活全般を扱うかたちで出来ている内地の国語の教科書は不向きだということである。そのために、先人の試みられた労作に三つの教科書がある。

一つは、既述の白鳥幸子撰者の「わたしのにほんご」、一つは、サンパウロ日伯文化普及会のにっぼんご(帝国書院版)。いまひとつは、伯国日本語学校連合会日本語普及部本「にっぼんごかいわ」である。

中のサンパウロ文館本は、日本内地での「国語」教科書の標針方針、内容ともに同類で、先に述べた風土の差異を取り去って、生活の背景を土地情に合ったものにしてある。他の前後二者は、語学を中心にしたものであるが、児童を念頭にあらゆる配慮をめぐらし、まさに画期的な労作といって過言ではない。後者はまだ刊行経途中のものであるが、前者は、全七冊及び別冊ともに完了した大作である。しかもそれらの指導書まで備え、授業するに当っては、カセットテープまで用意済みという周到さで、それなりの完璧さがある。その苦心の労作を軽々に批評すべきでないことも充分承知しているし、以下付記することも決して、その成果を低くみるものでもない。白鳥女史は最初心理専攻の方であったと聞く。全巻ともに、よく児童の生活を参照され、その素材を求められ、子どもの興味をそそり、学習意欲を高めさせることに苦心のあとはよく現えるのだけれども、児童自身の成長を確かめ、その段階過程を設けたというものではない。やはり、語学力の付与、強化を第一義とするだけに、それは望むべくもないのであろうか。

(3) アルゼンチン、ボリビア、パラグアイ、サンパウロ、ペレーン、ドミニカなど各地では事

業団支部の肝入りで、日本語教師その他関係者達が集団研修会を、機会ある毎に持っていることは有意義で、喜ばしいことである。そしてそのたび毎に論議されることは、指導方法はもとよりながら、結局指導理念に立ち到るといふ。

そのことのためにも、派遣指導教師の役割と責任も重大なことだと思われる。ただ一国一派遣指導教師（現在、アルゼンチン、パラグアイ、ボリビア、ドミニカに各1名派遣）にとつて、その任期内にこの問題処理がいかんにかはいうまでもない。特に、既述のとおり、大都市、中・小都市、奥地、戦前、戦後、集団、散在等々の大まかな分類によつても、その指導は一概に行えないことは明らかである。

ところが、一方、現場で直接児童に接している現場教師は、その責に忠実になればなるほど、正規の教員養成機関の出身者でないことや、教職未経験者という戸惑いや不安にかられ、指導理念及び教科書の指導方法を、派遣指導教師に求めてくるのは、当然の成り行きでもある。

この点、日本内地における指導主事に似た役割と体制を設けたのは、一対策にはちがいない。

但し、この両者の関係は、旧海外移住事業団、昭和18年度要領第15号の「指導教師派遣要領」に於て指導教師の職務として、

- (1) 日本語学校教師の指導、育成
- (2) 日本語教育の実施教授

とあるのみで、どのような方針や理念、指導方法で実施するのかその根拠が明確になっていない。そして、日本内地の教員制度と比較は無理としても、この派遣指導教師の任免権をもつものとして、現地の直接現場教師の任免権をもつものが、全く関係を持たないこと、そればかりでなく、直接現場教師は、待遇面からも恵まれておらず、奉仕性に依存している現状から、派遣指導教師がこれを監督するという関係は成立し難い。

この現実認識の上に立って、互いに信頼関係が結ばれていることは喜ばしいとも言えるが、一方で、そのため互いにその教域を侵さぬというタブーを作りかねない。派遣指導教師は、日本内地での、小・中・高の学校長もしくは教頭の歴任者であり、また物事の甘い辛いも知りつくした人生経験者であり、現場教師の要望に応え、指導助言も最も適切である筈であるにもかかわらず、このタブーが一つのネックとなっているのではないかと想像された。

派遣指導教師は、求められていた学習指導書の作成を、着任後の新田によって差はあるものの、全員がそれを完了するか、あるいは完了に近い業績を挙げている。

推薦された派遣指導教師が、先に言うような学校教育の熟達者である限りにおいて、その規範とするところは、日本内地の学校教育法であり、学習指導要領であることは当然の帰結であつて、またこれ以外に規範を求めるとするならば、抑々の派遣指導教師の選択規準もまた別に求める部分が必要となつてこよう。従つて、現在の派遣指導教師が求めに応じて作

成した学習指導の手引の骨子が、日本内地の学習指導要領であることは、誰がみても明らかである。こうなって然るべきなのだとする具体的事実として、現在使用されている教科書の大半が、日本の文部省検定教科書であってみれば、学習指導書の作成の規範を学習指導要領にとることは、極めて本来的なことだと言えるのである。

本稿において、現在の派遣指導教師の業績を云々する底意があって、このように展開しているのでは毛頭ない。実際、今回の調査期間中も、ある期間は、派遣指導教師の方々とも寝食をともにして、その苦勞話も聞いた。さまざまな試行錯誤もあるに相違ない。派遣指導教師が安易に上述の結果に立ち到っているのでもないことも認める。その誰もが、日本内地の学習指導要領を下敷にすれば事足りると思っているわけではなく、新しい酒は新しい皮袋に盛らねばならないことにはわきまえている。ある派遣指導教師は、五十五年度より施行の新学習指導要領の特色を扼え、（註：新学習指導要領により国語教育の領域を表現と理解という見方あるいは立場をとった。）特にその中の言語事項に焦点を合わせ、使用教科書における言語事項を目的とした単元を指定し、重点的授業を試みさせている。またある指導教師は、学習指導要領とは別に、自らの過去の演劇教育の経緯を生かして自らが脚本演出指導も行っており、その方面での実績を挙げている。

ただ、こうした学習指導要領を別にした派遣指導教師の特徴のそれぞれについて、報告者には気懸りなことがある。そしてその気懸りが、決して報告書の勝手な想像からだけでないから記しておかねばならない。

それは、各派遣指導教師の他と区別される特徴ある指導性もしくはその傾向が、それぞれの方々々が居住される場所（国ではなく、その地域）がもたらす要求に応じていることである。派遣指導教師は国単位に担当している筈で、大都市を居住地としようが、奥地をその場所に選ぼうが、指導範囲と指導対象はその国のある地域に限られてよいわけではない。もし地域差があり、特別にある地域にその指導性が適合し、他に不適合ならば、その由をことわらなければならぬ。もちろん、そう思っているとしても、言語指導が、ともすれば居住する場所に厚く、疎遠になるのも理解できるが、その指導が一般的指導法なのか、局所的もしくは重点的指導法なのかは、派遣指導教師は配慮さるべきである。

以上の如く、派遣指導教師に託された現場の学習指導を先導する役割は、現時点では十分に満足する状態に達しているとはいえない。そして、現在の状態で歳月が経過すれば事になるということでもなさそうに思われる。何故ならば、現場教師を先導しなければならないという絶対条件を満たすためには、一つには、派遣指導教師と現場教師との関係をもつと明確にしなければならない。派遣指導教師の役割を、補助（助言）とするか、先導とするかすら、曖昧であってみれば、派遣指導教師は、その役割と責任を自問している間に任期は過ぎってしまう。任期を二年とするならば、当然、この業務は最終的に行われなければならないものだけに、試行錯誤もよいが、先の絶対条件をあくまで絶対条件とすることをゆるがせたり、

等閑視は許されないことを、関係者は心に深く銘記してかかることであつたらうと思われる。

移住者子弟の日本語問題は、単に学校教育における「国語」の授業をどう補助するのかわかることではなくて、移住年月とともに変化する人間と言葉のかかわり方の見守りでなければならなかつた筈であつた。少くとも、国の政策において行つたところの移住問題の最終課題がここにある。それを先導することは、何人のよくするところであると言われるむきもあろうが、先導ということばを敢えて使う意味は、語学ではなく、移住者子弟として二言語併用者への成育過程を考えることでもあると思うからである。

このことは、かなり高度な、疑解なことと思われるかも知れないが、今回の調査旅行中、最も強く、報告者を驚かせ、先を越されたと思う事例があつたことを書き加えて、大方の諸賢の参考に供したいことがある。

既にその名を記した、ボリビア、サンタクルス市にある Colegio Alemán のドイツ語の取り扱いについてである。校長(もとよりドイツ人)は胸を張つて言つた。本校においては、スペイン語先習で、ドイツ語が教科として学習するのは、小学三年時からであると。長年の経験からそうしており、一年同時学習は徒らに混乱を起し、効果的でないこと、また三年からのドイツ語学習で、決して本国のドイツ語に遅れをとることがなく、卒業生はいつでも、ドイツ本国の諸学校に入学できるだけの学力を備えているという。

長い年月にわたる移住経験とその施策及びその教育の在り方はわれに較べて一日の長があるのであろう。またドイツ移住者家庭におけるゆるぎない母国語の生活や、スペイン語とドイツ語の抑々の親疎関係は、これまたわれわれとは同日に談ずべきではないことも承知しているが、少くとも、二言語併用者の道を運命づけられている児童教育の具体策として、先習後習の年令的配慮があつたことに、ドイツ人の教育科学を見る思いがしたのである。

なんでも往急に、あわてふためいて、忙がしくすることが、仕事らしい仕事だと思ひ、また勤苦勉勵が教育だと思ふ日本人気質に反省の機会を与えられた思いがしたのであつた。

但し、このことが可能な対象としては、奥地の戦後集団移住地、及びラ・コルメナ移住地の如き二、三の特別の地ではなからうかと思われる。

あ と が き

調査に出発する私達調査団を前に、外務省移住課首席事務官田中三郎氏(当時)は次のように言われた。

「やって来てもらいたい仕事は、何をどこまでやるかという問題です。」と。

私は帰国して外務省に挨拶に行き、次のように言った。

「あの問題を、可能の限界はどこにあるのか、あるいは許容の範囲はどこまでなのかというふうに捉えると、捉えがたいということだけがよくわかりました」と。

移住にともなう日本語の善後策といってしまうと簡単なことだが、人間と言葉との因縁の深さを見てしまった私には、とても、そんな応急処置の対象ではないことを思い知らされていたのである。

言葉の未来性を考えることはもとより、移住論については、ズブの素人である私でさえも、人間が移住することによって、人間内部に起る致命的現象とは何かを哲学的に考えざるを得なかった。

移住は、内地における引越と同じではない。引越は人間生活の空間的な移動、移転といえるが、移住は空間的移動のうちに始まる生活の時間的推移というものであった。勿論この時間的推移は単なる物理的時間でなく、空間的移動を果たしたという観念が蔽いかぶさった特殊時間推移である。移住者が、その移住の意味を運命的に背負う十字架に相当するものが、移住者の言語だったのではなかったか。

田中首席事務官の、何をどこまでやるかの、実は最も解答を出さねばならぬことは、「何を」の「何」の方が問題だったのである。私はそう思う。

移住者は祖国を後にした。われわれは同胞を見送った。一体、見送りとは、旅立って行った人のどこまでを見送りというのか。どこまでのどこは、国境という地点を指すのか、後姿が見えなくなるまでという時点なのか。私は、移住者子弟の日本語教育問題は、移住者の後姿に残った運命的驕りを見守ることだと思う。

私は、そんな気持で、この報告書をまとめたのである。

80年代の年明けの日に認む

上 原 拜 男

日本語学校概況（調査地域のみ）

附表

No	校名	学名	校名	所在地	開校年月日	校長名 (内は前校長者数)	生徒数		授業時間 年間	課外活動	課外費 円	備考
							男	女				
ベル	ク・クマサン総合学校			リマプアプロリープ クマサン道	1971.4	0 ()	小 398 計 906	185	3	100	第1外部：日本語 第2外部：英語	
	ラ・ビクトリア日本人小学校			リマプアプロリープ クマサン道	1948.4	4 (0)	小 180 中 160 計 355	200	5	50	わかしのほんご なかよし、I 国際字友会日本語部 国際字友会日本語部	
	カセ・ガルベス小学校			カサガサアレキッパ ムカ街	1926.5	2 (0)	小 271 計 487	200 150	3	1300	日本語生30名 小1~5	
	ベルン中央日本人文化館日本語 講習会			リマプアプロリープ ムカ街	1901.10	16 (1)	初級 85 中級 12 上級 9 計 206	168 / 220	4	330	国際字友会 日本語部 国際字友会	
	ワクル郡日本人協会日本語講習会			ワクル郡ワクル ムカ街	1979.1	3 (0)	小 35 計 40	216	3~9	-	わかしのほんご 外	
	チカラ・セーロ小学校			リマプアプロリープ クマサン道	1965.4	3 ()	小 70 計 108	108	3	-	課外授業	
	リベルター州日本人文化館日本語 講習会			リベルター州 クマサン道	1969.3	8 (4)	小 65 計 135	340	3	450	入籍者数 1139人	
マリビ	サンファン日本語学校			サンファン クマサン道	1969.3	7 (3)	小 110 中 27 計 213	405	4	127	" " 659人	
	コロムブ仲親第一学校			コロムブ クマサン道	1960.12	7 (3)	小 14 中 21 計 59	288	4	104	" " 430人	
	(エバンヘリカトリック第一中 小) 第一中			エバンヘリカ クマサン道		7 (3)	小 72 中 71 計 143	144	4	104	" " 430人	
	エスクリンセントル エスクリン			" クマサン道	1960.9	7 (0)	小 63 計 110	108	4	250	" " 430人	

No	国名	学校名	所在地	開校年月日	教員数 (内は専任教員数)	生徒数		授業時間		採択教科書	蔵書数	備品点数	備考
						男	女	計	年間				
	ボリビア	エスグワセントルヌエバ エスベランサ	コロムビアナナフ第二			中 23	34	59	210	5			
	ブラジル	フラム日本小中学校	フラム移民地フラム地区	1953.3	3(0)	31	26	51				4	フラム入植者数1040人
		富士日本小中学校	" 富士地区	1975	3(0)	20	24	44	163	3		24	チーベス " 230人
		アンソロア日本小中学校	" アンソロア地区	1981.7	5(0)	39	24	63	165	3		36	7ルトワナ " 1634人
		チーベス中央日本小中学校	チーベス移民地D-5カネ	1955.10	3(0)	14	24	38		3		56	イグアス " 1001人
		アカラジャ日本小中学校 (第一日小中学校)	アルトパナナ移民地アカ カラジャ 23カ	1963.2	6(0)	36	36	72	300	6		42	アマンバイ " 1011人
		ピラゴ日本小中学校 (第一日小)	" " 22カ	1964.2	3(0)	27	24	51	210	3.5		40	
		高松日本小中学校 (第二日小)	" " 13カ	1964.3	3(0)	22	26	48	200	3~6		74	
		ピラゴ中央日本小中学校	" 市街地	1976.3	4(1)	20	24	43	400	8		5	
		イグアス日本小中学校	イグアス移民地中央市街地	1978.2	4(1)	63	45	107	896	12		4	
		アマンバイ日本小中学校	ペトロブエンカリアーロ市	1960.4	4(1)	75	102	177	656			237	13
		フラム日本小中学校	フラム移民地フラム地区	1964.3	2(0)	16	35	50	120	4		70	13
		ピラゴ中央日小中学校	アルトパナナ移民地市街地	1977.3	1(1)	19	14	37	204	4		4	イグアス中央日小と共有
		ピラゴ日小中学校	" " "	1972.7	3(0)	15	14	33	136	3		2	
		イグアス日小中学校	イグアス移民地中央市街地	1978.2		23	17	40					
		ピュエロス学園	サンパウロ市 ピュエロス区	1977.4	4(1) 幼	3	6	9	144	4		400	63
		だるま塾	ピラノバカン・エリシヤ	1934	1() 幼	6	5	11	1320	3.3		200	457
		ピラ・カマン日本小中学校	ピラガマンダリ・メス		1(0) 小	9	21	30		20		120	62
		日小中学校	ピケリ	1971.1	5(2) 小	33	29	62	104 420	2~4		300	7
		日小日本小中学校	カストロアルベス通	1975.4	3(1) 小	31	41	72		4~6		100	53
		日小日本小中学校イタケラ	イタケラ	1959	1(0) 小	14	23	37	135	10		50	3

No	氏名	学名	校名	所在地	開校年月日	教員数 ()内は非常勤者数	生徒数		授業時間		採択教科書	添習数	備考
							男	女	年間	週			
	ブラジル	ブラジルク日本語学校 Bハル学園日本語部	サンパウロ市 サントアマーロ ビュイロス区	1971.3 1966.2	1(0) 1(0)	4 0	10 2	14 2	10 630	にっぽんご にっぽんご、東京書籍 会話の本	20 10		
		明 朗 塾	パロンドウプラザ	1972.4	1(1)	7	7	14	108	会話の本、日本語 文法、光村図書	60		
		桜の光学園	サンタクルス街	1952.5	8()	17	13	30	9-12	東京書籍、外	300	65	
		セルクーラ・モザール日本語学校	ビュイロス区	1961.4	6(1)	4	5	9	220	日本語会誌 光村図書 日本の学習雑誌	200	3	
		みどりこ 篇 山 塾	" "	1959.2	2(0)	1	1	2					
		赤岡学院日本語学校	ビクラノサンタノ	1933.8	5(3)	35	42	77	360	文部省検定	800	82	
		昭和日本語学校	サントアマーロ	1956.9	1(0)	40	41	81		ブラジル版	50	15	
		ジュルジノ・ササキモロ・ラドカ ル日本語学校	イタケウ	1977.8	1(0)	12	22	34	6	にっぽんご	300	3	
		アンマアクス日本語学校	サンマアクス	1979.9	1(1)	20	28	48	284	にっぽんご、光村図書	50	5	
		トレス・コロアス日本語学校	ボンクラウサ地区	1960	2(0)	30	60	110	5-10	にっぽんご 文部省検定	20	20	
		パトリアルカ日本語学校	パトリアルカ	1976.5	1(0)	14	22	36		" にっぽんご	73	6	
		カンパベロ学園	カンパベロ	1974.2	5(2)	16	6	22	73	ブラジル版	235	30	
		光 学 園	ウルグァーヌルカンクス			33	43	76					
		モハヤナ学園	サンジョアキン	1961.1	5(3)	12	16	28	1000	ブラジル版	287	5	
		ピラチアマンカめぐみ日本語学校	パレリサザカルムベリウ	1970.7	4(4)	27	42	69	63	光村図書、東京書籍	100	9	

No	国名	学校名	所在地	開校年月日	校員数 ()内は専 任教員数	生徒数			授業時間		採択教科書	蔵書数	備品 点数	備考
						男	女	計	年間	週				
	ブラジル	ピクナムガメグメ日本語学校 "サンパウロ市 スレリヂウザガルバリーニ "ピモンセーウ "ピークマチウザ "カンストレ区 "ピラアルウサアンブンドレ	1934.7 1976.1 1974.2	1(0) 1(0) 2(2) 6()	中 小 小 幼	0 23 25 12	1 24 33 13	1 47 60 25	1 149	6	にっぽんごかいわ にっぽんご外 東京書籍 にっぽんご にっぽんご、東京書籍	96 76 100 200	14 23 — 7	
		レブレーヤ文化体育協会日本語校 "サントアモロ		2(1)	中	6	4	10	446	12	ブラジル版	200	10	
		アグアレーザ日本語学校 "アルボラウーニス		1(0)	小	5	9	14	700		ブラジル版 ブラジル版	50	2	
		プロクリンパクリス日本語学校 "ポアウカ		1(1)	小	16	14	30		4	ブラジル版、東京書籍	—	32	
		アクリマノン学園 "ゲルガス区		3(2)	小	39	31	70	300	7.5	ブラジル版、東京書籍	200	60	
		ゲルガス学園 "ゲルガス区		2(1)	小	8	5	13			光村図書	150	13	
		シダザアグマール日本語学園 "シダザアグマール "ピク・フ・ルセーザ日本語学校 "ピクマチウザ "シムンセントレノン		2(0) 1(0) 3(0) 2(1)	中 小	2 29 17 11	2 41 18 15	4 70 35 26			ブラジル版 ブラジル版 にっぽんご、日本語読本 ブラジル版	45 — 70 100	10 — 11 10	
		マウダ文藝日本語学校 "シムンセントレノン		7(1)	中	0	1	1		8	ブラジル版、東京書籍		20	
		ピクマリア日本語学校 "ピクマリア		1(0)	小	74	106	180			ブラジル版	30	10	
		マエウ学園 "インダ・アナポリス		1(1)	小	7	12	19		7.5	にっぽんご	200	3	

No	国名	学 校 名	所 在 地	開 校 年 月 日	校 風 登 録 費 格 別 額 (円)	生 徒 数		授 業 時 間		採 取 教 科 書	採 取 誌 点 数	備 考
						男	女	計	毎 週			
	ブラジル	イタイインパルシス日本語学校	サンパウロ市 イタインパウルス	1970	1 (1)	幼	0	1	1		26	
		在伯海運人公 シブアルガンカ支部日本語学校	エモトラーダダピラエマ	1968. 2	1 (0)	小	8	17	25		20	
		生急学校	カリエンタルジャバタアラ	1970. 1	2 (0)	幼	6	11	17	3	190	49
		カシノギ学校	カシノギ区	1973. 2	1 (0)	小	41	37	78	7.5	ブラジル版	-
		カシノブレンドン日本語学校	カシノブアモロ		1 (0)	幼	0	3	3	10	にっぽんご	
		松の友学園	リベルターダ区	1977. 1	1 (0)	小	20	13	33	3	にっぽんご 新しい国語	200
(北 伯)		カロン日本語学校	ピラカロン	1975. 2	1 (0)	小	19	24	43		日本語読本	20
		メヌマ日本語学校	サンタイサベル都 クアラルホーベータ	1963. 4	2 (0)	幼	1	4	5	3	153	
		イタコ・メヌマ日本語学校	パラ州 イタコ・メヌマ	1975		幼	20	27	47			
		カステルモル日本語学校	パラ州 カステルモル	1970. 4	7 (0)	小	15	13	28	120	30	2 人種学級 330人
		マックイロ日本語学校	パラ州 マックイロ			幼	17	21	38		300	6 人種学級 67人
		サンタイサベル日本語学校	パラ州 サンタイサベル	1970. 1	3 (0)	小	37	40	82	196	190	1 人種学級 870人
		トイブス日本語学校	パラ州 トイブス	1969. 12	3 (0)	小	50	53	112	180	1800	2 人種学級 1890人
		アラク日本語学校	パラ州 アラク	1973. 4	3 (0)	小	19	20	39	300	70	2 人種学級 292人
		アドベンス日本語学校	ベレメン		4							
アルゼンチン		日本語学校(ボカリアノア日本校)	ベレメン	1977. 2	10 (0)	幼	7	8	15		670	114
		アエノスアイレス日本語学校	アエノスアイレス市 D.R.エンリク									

No	国名	学校名	所在地	開校年月日	教員数 (内資格)	生徒数		授業時間		採択教科書	蔵書数	備品 点数	備考
						男	女	年間	週				
	アメリカン	ブエノシアイレイン日本学校	ワイノサエット街			小 116	119	235					
		エスコバール日本学校	エスコバール、ヘレン公園区	1941.2	2(0)	小 34	23	59	15	光村図書	765	14	
		ノルア日本学校	クラールサルクセント	1944.4	2(1)	小 9	14	23			120	16	
						低 8	2	10	3				
						中 6	3	9	3				
						高 4	4	8	0				
						計 38	27	60					補修科6.4計10名含む
		ベジ・フーネル日本学校	インヘーロープロダグス	1948.3	1(0)	小 12	10	22	9	光村図書	150	12	
		ホセ・セ・バス		1934	1(1)	小 30	27	57	15-1M	光村図書	200	83	
		西郷日本学校	ベロン	1938	2(0)	小 16	15	31	3-7	光村図書		22	別に成人講座あり
		ノルロ日本学校	シマリベルランド	1953	2(1)	幼 4	3	7			200	12	
						小 9	15	24	7	光村図書			
						補 2	1	3	3				
						計 15	19	34					
		マルコスバス日本学校	マルコスバス	1974.1	1(0)	小 3	4	7	7	光村図書	127	6	入籍者数 51人
		ブルゴロ日本学校	ブルゴロ	1934	2(0)	幼 6	8	14					
						小 14	22	36		光村図書	150	74	
						計 20	30	50	5				
		フロレンツァパレー日本学校	フロレンツァパレー	1957.2	3(0)	小 42	31	73	16	光村図書	180	52	
		ビジュエリ日本学校	ビジュエリ	1975.0	2(0)	小 7	8	15	16	光村図書	58	14	
		アヒル学園	エルバト	1972	1(0)	小 10	7	17	6	光村図書	100	17	入籍者数 66人
		アンタカ日本学校	コロムヤサンサウカ	1972.3	1(0)	初 3	4	9	7	光村図書	52	11	
						小 11	13	24					
						計 16	17	33					

No	氏名	学校名	所在地	開校年月日	教員数 (内は専任者数)	生徒数		授業時間		設備 点数	備考	
						男	女	年間	週			
アメリカン		ク・ブクラ日本遊学校	クブクラ(コロムビア)	1977.4	1(0)	小	10	9	19	150	入籍者数176人	
		ク・カベージ日本遊学校	コロムビアウエルキヤ	1969.5	3(1)	小	40	33	73	350		
アメリカン		エチペリア日本遊学校	コロムビアエスガパン	1972.9	1(0)	小	10	10	20		27	入籍者数71人
		クビルコイ日本遊学校	クビルコイ	1964.3	2(1)	小	8	6	14		9	
		ロサリア日本遊学校	ロサリア	1964.3	1(0)	小	15	13	28		35	
		コルムバ日本遊学校	コルムバ	1956.4	1(0)	小	16	33	51		60	
		両部ノンド日本遊学校	コロムビアアングス	1971.8	2(0)	小	14	15	29		70	
		北湖ノンド日本遊学校	ノンドサ	1977.5	1(0)	幼	1	7	8		30	
		ボサーダス日本遊学校	ボサーダス、ジクマン街	1974.6	2(0)	小	22	21	43		230	
		アルトパタ日本遊学校	ハルヴィンアメリカ	1966.12	1(0)	小	13	6	19		300	
		ガルズベ日本遊学校	コロムビアガルズベ	1962.6	1(0)				22			
		エルドランド日本遊学校	エルドランド	1977.10	2(0)	小	7	13	20		14	
		東部ク・ブクラ日本遊学校	ク・ブクラ、サントペル	1979.3	1(0)	幼	2	2	4		13	
		アメリカン		アルマツェル日本遊学校	コロムビアアルマツェル	1979.4	1(0)	小	10	10	20	
ブカスーノ日本遊学校	サンインドロブカスーノ			1979.7	1(1)	小	25	35	60			
日系クブクラ日本遊学校				1979.1	1(0)	幼	4	4	8			
ク・カベージ日本遊学校				1967.5	1(0)	幼			10			
アメリカン		ク・ブクラ日本遊学校				計	6	11	17	45		
		ク・カベージ日本遊学校				小			20			
						計						

No	国名	学校名	所在地	開校年月日	教員数 (内は有資格者数)	生徒数		授業時間 年間	採択教科書	年度	備品 点数	備考		
						男	女							
カ	カ	ESCOLA DE INSTRUÇÃO DE IDIOMA JAPONÊS セントドミンゴ日本語学校(本校)	セントドミンゴ市プアカストロ	1973.9	3(0)	小 14 研 3 計 17	10 20	360	光村図書	1150	51			
		ク・ペーガ日本語学校(分校)	ク・ペーガ市	1973.7	1(0)	小 3 計 3	"	"	光村図書					
		ハラバコア日本語学校(分校)	ハラバコア市	1973.7	1(0)	小 1 計 1	"	"	光村図書				人数未定 55人	
		コンスタンサ日本語学校(分校)	コンスタンサ市	1973.7	2(0)	小 6 計 6			160	光村図書			55人	
		ルハボン日本語学校(創立校)	ルハボン市	1973.4	1(0)	小 4 計 4			3	光村図書			26人	
		日加学園	トロント市	1973.9	9(3)	小 11 幼 4 合計 15			120	光村図書	30	カセツ カーブ 紙芝居 石子	HAMILTON 5分校2	
		国際教養	トロント市	1976.9	11(0)	小 23 幼 6 合計 29			120	光村図書	300	石子		
		バンクーバー日本語学校	バンクーバー市	1966.1	4(2)	小 10 計 10			117					
		クックストーン日本語学校	クックストーン市	1971.9		小 17 計 17			124					
		メサ・ブレストン日本語学校	メサ・ブレストン市	1960		小 9 計 9			90					
ヴェルムズラング・クモンツェー	ヴェルムズラング市	1973.9		小 14 計 14			54							
日本語クラス	B.C州ラングレー	1973.9		小 24 計 24			24							
アレー日本語学校	B.C州アレー	1973.9		小 14 計 14			14							
カムループス日本語学校	B.C州カムループス	1973.6		小 4 計 4			44							
クローチ日本語学校	B.C州クローチ			小 20 計 20			20							
日本語会館校	バンクーバー市(通称)			小 20 計 20			20							

JICA